



新年懇親会 (NSビル・トッパンムーア会議室)

午後六時より新宿NSビル八階のトッパンムーア会議室において恒例の新年懇親会が開催された。宮沢会長から「昨年に引き続き、経済不況などきびしい諸問題が渦まき苦難の年だろうが、二千五百余名の会員がますます元気でそして協力して静中静高関東同窓会の発展を図り、それぞれの糧にしようではありませんか」と年頭の挨拶があり、参会者の共感をこめた拍手がわいた。

石割先輩の首頭で乾杯、和やかに懇親パーティーに入った。参会者は三十八回の石割大先輩から八十三回の中村・木宮両君まで四十七名、水割のグラス片手に先輩後輩隔意なく同窓誼み、賑やかに話はずむ……。

時がすぎ、例によって校歌を全部斉唱し、再会を約して幕を閉じた。

静中・静高 関東同窓会 会報

静中・静高関東同窓会
会報 第15号
昭和58年6月24日発行
編集人 月見里得知郎

その後の同窓会活動

- ◎幹事会
 - 58年3月29日(火) 18時より
 - 新宿NSビル8F、トッパンムーア会議室にて
 - 出席幹事37名
 - 議事
 - ①88年度総会について…6月24日(金)築地スエヒロにて、会費五千円(学生二千円)、各期多数の参加を要請
 - ②会報十五号への投稿を依頼
 - ③名簿整備のため訂正連絡を依頼(ともに総会で配布のために締切りは4月30日とする)
 - ④会費納入について…会員二千五百余名で57年度千名に対し、今年度は七百名と減少なので協力を強く要請(二千円、学生は千円)
 - ⑤ゴルフについて(後日5月11日東名CCで開催と決定)
 - ⑥次回幹事会は5月下旬を予定
- 以上を協議、決定事項についてはこぞって協力を約したのち懇親の一刻を持った。

- ◎幹事会 5月19日
 - 新宿NSビルにて、出席者43名
 - 議事次の通り。
 - ①五七年度事業報告同決算案。奥野副会長から説明承認された。
 - ②五八年度事業計画案、同予算案

奥野副会長から提案、予算について収支の悪化が問題となり、委員から意見提案があった。会長から会費拠出率の向上と会報名簿の発行部数制限による収支向上案が提案され、同案に決定した。

③総会案内状の発送と各期幹事に依頼した。

◎総会案内状発送 5月26日

○前回幹事会に参加の期のうち連絡依頼の出来なかった期の会員に対する案内状の発送業務を有志で行った。また新卒進学会員に対する案内の発送を学生会員が行った。参加有志次の通り。

67 成岡、梶原、68 荒谷、69 松島
98 森、事務局奥野、月見里、山田。

年会費を拠出しましょう

右の幹事会の記事に度々出ていますように、五七年度の会費のあつまりが良くないので、五八年度の財務上問題が起きて居ります。忘れていた方は今すぐ、思いついた時に送って置きましょう。

珍しい記事・貴重な体験をお寄せ下さい

経験豊富な古い期の方、新しい期の呼吸を感じさせる新しい期の方、夫々の面白さをもっているものと思われま。同期の方の喜ぶは一層と思えます。



四二回 (よんに一會)

関東同窓会の会員名簿に載っているよんに一會員は三十余名居るが、消息の定かでない者が結構多いのは残念である。精粗はあるが知れる範囲で近況を名簿順に拾って紹介しよう◆井出多米夫君——知らぬ者は無い名物男、往年の委員長・応援団長時代の元氣と高聲は少しも衰えない。いまだ蹴球はやるし、声色もますますさびを帯びて来た。世話好きは衆の認める所であるが、涙ぐましい程の奥さん孝行は知る人ぞ知るで、早く病氣が快癒して夫君タメサンに帰宅時間を気にさせないような日の日も早く来る事を祈念して止まない◆岩崎康君——ヤスサンヤスサンと親しまれている。本人は「口ベタで何の取柄も無い無頼の徒だ」と放言しているが、どうしてどうして正にその正反對。筆者は言いたい事を言い、やりたい事をやりながら仕事も金も先方から追いかけて来る、しかも男女から好かれるこのボスを「無冠の帝王」

と絶賛している。口は悪くても心は暖かい。異色の存在◆岩波信平君——「いちゃもんの信ちゃん」と自他共に認めている。ただし横車を押すとか言いばかりをつけるのでなく正論道理を堂々と……と言うので何人も承服し敬愛の念を抱く。常に山高幅風の黒色帽子を手放さない身嗜みよい紳士である。いつも長生きすると口にするのは頼もしい◆国分友英君——「よんに一會の一泊旅行はまだか」と再三督促するが、遠隔の仙台にいたのでその氣持はよくわかる。なかなか会えないが、どの会合でも彼の事は必ず話題に上る。慧眼を持った巨漢の言動が強烈な印象を仲間と与えるらしい。総会には是非出席してほしい◆高塚嘉一君——タメサンは時々神田駅付近で会うという。元氣との事、是非会いたい◆中島敏君——教育大教授を退官してからよく会合には出席する。福徳円満な風貌と人柄だが心は強く酒も強い。徳利を抱えてとっくりと話してみたい◆坂野隆介君——見るからに親しめる童顔

そのものの、好々爺と言った所。最近健康を害して北里病院に通っているとか。一日も早く全快してあの笑顔を見せてほしい◆堀夷君——防衛庁の高官として直接国家に尽くされたが、退官してから第二の仕事で多忙の中を度々会合に出席してくれる。前歴から来るイメージを破って、話しを交わせば人懐っこくさわやかな後味を与えてくれる◆宮崎忠輝君——何年経っても老いを知らぬ元氣一杯な、逸物の所有者我等の金大忠氏こと「チューキサン」この三月一杯で郷里浜松市へ移住されたのはお名残惜しや！で有志による盛大な送別会を三月七日新橋で行なった。諸会への皆出席の彼は関東同窓会や江の島へは必ず出席すると確約してくれた。なお四六時中剣は友の生活であるが、トップムニアの浜松・静岡両工場の剣道部を指導するというニースは級友宮沢・宮崎両君の友情の程が伺えて嬉しくてならない。浜名湖周辺へのよんに一會旅行の話も既に出て

宮沢次郎君——今更紹介する迄もないわが関東同窓会の初代名会長 トップムニア社長の外色々の名譽ある役職がついて回る。よんに一會の出世頭。要するに信念の人実行の人、情の人で、一回りも二回りも人物が大きい。余りにも多忙の為一時体調をくずしたが、禁酒禁煙、強い精神力で克服、今又世界を股に活躍中。関東同窓会はもとより、傘下の江の島会に対しても多大の賛助を惜しみなく寄せてくれる。注文は唯一つ、健康だけは留意してほしい◆村上慎威君——裁判官退官後習志野で法律事務所を開設活躍中、遠きを厭わず總會や江の島会に元氣な顔を見せてくれる◆村松直君——江の島会現会長、卅六年前僅か数人だったものを現在の七百数十人の大世帯に発展させた張本人。「永遠の青年」を自負して多彩な日々を楽しんでいる。上述のヤスサンに次いで女性にもてるらしい。本人は、人格の力かな」と教育的見解に自ら陶然としている。それに又「皆さんのご芳情にはとても報い切れないのでせめて御焼香だけはさせて死にたい」と言っている。本当に長生きするかも知れない◆柳川太郎君——関東同窓会創立当初からの名副会長。既報の通り目下自宅に於いてリハビリに専念中であるが、是非共快癒の晴姿を我々の前に見せてもらいたい◆上記以外のよんに一會員の消息を是非知りたいたい。本人又は知人のお知らせを切望する。ともあれ静中・静岡の同窓会を背負って立つの氣概に燃えているよんに一會員とよんに一會に栄光の倍加されんことを祈念する◆なおよんに一會々長の森鏡君はわざわざ静岡から色々の会合に馳せつけてくれるので感謝に堪えない。聞けば地元静岡に於けるよんに一會は五月下旬に催されるとか楽しみである。

四五回

(村松直)

一、この便りの初めに青木栄君の計をお知らせしなければならぬ

のはまことに残念です。今年1月12日のおしらせで、同君が退院し自宅療養中とは述べましたが、奥様のお話では、1月に再入院加療中3月25日容態が急変し不帰の人となられた由、皆様とともにご冥福をお祈りする次第であります。27日の通夜には鈴木が御霊におまじりし、静岡の村松圭三君とも相談して「静中第45期生一同」の名でご香奠を供えてまいりました。

また28日の告別式には柏木・桜井・田代・田附の4君がお参りしてくれました。ご報告致します。

二、同じ1月12日付のおしらせで述べました田代君はまだ週二回通院されておるようですが、大変元氣ですし、大石君(成増)も多様な性関節炎とかで長い時間歩くのを避けておられるようですが、元氣です。何れにしてもお互いこの年で体の部分が方々疲れて来ているようですから十分大切にしたいものです。

三、一昨年10月21日第45期会であるいとお世話いただいた黒田明彦君は、あのあとお店で長く勤め信頼していた方が引退し、あの席で紹介のあった脱サラで店の運営を任せることにしていた方も都合でやめられたようです。そのため「桂林」の運営を任せられる方を

探しておられたようですがなかなか得られず、結局、自身で当たることになった旨この三月に連絡がありました。そして、「どうぞまたお出で下さい」とのことでした。昨年夏の便りで、秋には45期会を述べながら約束を果たさず恐縮しておりますが、私の気持の上でお三人の入院の情報もあって会の開催を躊躇した感はいなめません。ご寛容下さい。(鈴木弥門)

四七回

今年の一月二〇日(木)に新宿のマイ・シティ、八階の松澄に集まる。参会者一寸少く十一名。幹事長の亀山が体調をくずして突然入院。代役に同じ杉並区住人の志田が吉田会計幹事と共に活躍。亀山には席上寄せ書きの見舞状を纏めたが、幸に間もなく退院、現在は元氣回復の由。

会うことの回を重ねるたびに、皆の顔が益々昔の童顔に戻る感じのするのはどうしたことであろうか。例によって喋ること、談ずること、何時時に変らず。趣味の話、油絵のこと、日本画のこと、テニスの腕前のこと、女性からの挑戦試合に応じて若返っているうれしい話のこと、ゴルフのスコア、釣果の話、国家・社会のこと。清

談多く、一同君子なり。唯、後藤の、在学時代のカフェーでのご遊興、つづく停学の腕白物語は、その夜の白眉であり、亦初耳であったであろう。

不参の誰かれの噂話、名前も出て、元氣な奴には次回は非共さそいかけようと一決。その名前、石川、田中(榎原)、関口……。呑むことも亦常に不変。時のたつのを知らず。

最近仲間の一人「長谷末夫」を喪う。又、佐津川の母堂九四才で永眠の由。合掌。

当日の出席者(順不同)志田、吉田、山上、中村、片山、後藤、堀、野口、今関、杉江、杉山。(今関智吉)

五二回

われわれ五二期生も六四才という信じられないような年令に達した。来年は、とうとう公認の老人となる。所得税の老年者控除が適用されるし、老令年金の支給も受けられる。しかし、前にもこの会報に書いたと思うが、自分が老人になったという実感は全くといってよいほどない。まだ二七、八々の体力もある筈だと信じている。

泳(千メートル)、車の運転(東京静岡往復)、(ゴルフ三六ホール)などやってみると、まだまだかなりの体力は残っていることが実証される。諸君頑張ろうではないか。われわれのこのような実感については、おそらく同期の諸君の大部分が同感というだろうと思う。たまに若い人から「ご老体」とは思う。そんなときに、自分と同年輩の友人をみたときなどに、自分もこんな風に見えるのかなあど一瞬年令というものとじつと対面することがある。まあいづれにしても若かった時代はなつかしい。

それでは新年にのぼせうといっているうち今度は幹事の新美君が病氣で倒れるという事故があつてクラス会は流れてしまった。新美君はその後回復して今では元氣に職場に戻っている。それともう一つ場に戻っている。それともう一つ

のアクシデントは、あの元氣な直(じき)さんが去年の一月に倒れたことだ。会社で残業中に心筋こうそくの発作を起し、直ちに入院、手当が早かったために大事には至らなかったが、場所は心臓、たまたま残業中では若い部下がおり、しかも至近距離に立派な病院があつたからよかつたものの、銀座あたりで飲んでいたときに発作がこよものならアウトになつていたかもしれない。日頃善行を積んでいた彼に神が運をさずけたのであろう。三か月の入院の後、彼は不死鳥のようによみがえり、再び何事もなかつたかの如く芝浦のオフィスに通っている。ゴルフ場で華麗な、インパクトのとき一寸うしろへさがることもあるショットをみせる日も間近だと思う。在京同期生の連絡の要であつた直さんのダウンですっかり連絡網が破壊されてしまったが、それでも辛うじて去年の一月四日、苦米地、曾根の両君が静岡へ行き

東京には三五名位の同期生がおり大部分の人がそれぞれまだ元氣で活躍しているが、なかなか会う機会がない。今年も五月二日に静岡の浮月で定期総会があるが、そのときは静岡の諸君のなつかしい顔を見ることが出来る。これも一年に一回きり。東京では毎年春に会合を開くことになっており、去年の春丸の内国際ビルの地下のレストランで恒例のクラス会を計画し案内状まで出したが、欠席者が多くまた幹事の一人太田逸夫君が急に福岡の会社へ転出がきまり

地元の有志と歓談し、翌五日の日

曜日に島田ゴルフ場で伊藤(恵)、香川、沢の諸君と、それに伊藤、香川の二世が加わって七名でプレーした。広川君も参加がきまっております。ホテルの予約までしておいたが急用で来られなくなり残念だった。広川君は昔の映画の仕事に戻り楽しみに活躍している。今度東京裁判という記録映画の四時間半の大作が東京の大劇場で上映されるが、この作品の製作者小林正樹の片腕となって完成に力を貸したのは広川君である。上映されたら観に行こうと思う。

さて、島田ゴルフ場での成績は優勝、二、三位は若い人、そして永久スクラッチの苔米地と曾根は曾根の勝ち、三枚のチョコレートは曾根の手へ。もう一人の永久スクラッチは直さんだが、彼の参加が待ち遠しい。しかし、香川、伊藤両君も立派な跡継ぎができて安泰と見受けた。なかなかしつかりした若者である。

ところで、去年から計画されて実現しなかった東京在住の同期生ゴルフの会がようやく綾部君の世話で今週土曜日(四月三〇日)に相模原ゴルフクラブで行われる運びとなった。同期生ゴルフといえど、かつては三組か四組のコンペが組めて、紫のあやめコースなど

で賑やかにやったものだ。コンペには必ず顔を出す坂本君を想い出す。なつかしく悲しい思い出である。今週の相模原は綾部、川島、苔米地の三君と私曾根の四名であるが、元気の管の服部(雅)もこの頃姿をみせないし、佐藤(昌)も磯貝の諸君もどうしたのだろうか。いずれ、去年の暮流れたクラス会をなるべく早い機会に開くことにしその案内状を送る運びとしたいので、在京同期の諸君はなるべく大勢出席することを期待したい。では、最後に、同期の諸君の健康と一層の活躍を祈ってこの報告をおわる。(曾根信一)

五四回

この写真の主が誰だか分りませんか? 静中五四季会の一人で、日本、否、世界的脳神経外科の權威佐野圭司君その人である。

一昨年、退官されてから、お仕事で小生の家から目と鼻の先の帝京大学に移られたことを知っていたが、いつも多忙のようで、仕事の邪魔になつては、との配慮から、つい日を過ぎて来たが、今回の「同期の便り」には是非ご登場願おうと、一日、大学に同君を訪ねた。

本館六階にある同君の部屋に行

くと、「丁度、手術が終つたところですよ。よかった」と迎える同君の応援などところは、静中の頃と変わらな

い。臨床は授業と研究に加え、患者のため診療があり、ウィークデーは、ほとんど仕事があると、多忙を訴えたが、こぼす言葉と裏腹に、白衣でデンと構えて笑顔で



病院へ行つたことがある。彼は快く引受け、特に念入りに診察し、懇切丁寧なアドバイスをしてくれた。同期でも鈴木猛君や瀬津君、それに青木秀隆君の弟の豊君なども色々相談をもつて行つたくちだが、53期の先輩達の間でも、彼の面倒見のいいのは有名だそう

静高時代か、近所に下宿していた平林一郎君が、「自分が寝る前に彼の下宿の窓の灯が消えていたのを見たことはなかった」と言っていたが、ことほど左様に、温厚な顔に似合わぬ猛烈な勉強家であつたことも事実だ。

静高理乙では塩谷陽一君、中村武君らと一緒にいたが、彼は東大医学部へ進んだ。戦争末期、短期現役の軍医として下田の近くにある淡海軍病院に四か月間兵役に勤務したこともある。

昭和二十年大学を卒業すると、第一外科(大槻教授、二十三年から清水教授)に入局、二十六年医博(東大)、三十一年講師、翌年助教授となり、三十六年から五十六年までの長きに亘って、脳神経外科学講座の初代教授として東大教授をつとめられ、退官して東大名譽教授・帝京大学医学部脳神経外科主任教授となり、現在に至っている。

家は望月逸夫君の家と浅間神社の大鳥居を挟んで左右にあると聞いた。いまでも在所では病院を経営されているが、加えて財団法人脳障害研究所が現地に設立されたため、それ等の関係からも富士宮へよく行かれるとのことである。

更に、海外の学界には多くの名誉会員、客員会員として、また客員教授としては、カリフォルニア

話す雰囲気からは、仕事の苦勞より、仕事に意欲を燃やしているのが感じとられるのも同君の人の柄のせい。肩書きのいかめしさで二の足を踏んだが、東大脳神経外科主任教授時代、小生のところの家主が、頭が痛いと訴え、佐野君の診察を小生に頼み込んで来たので、東大

静中時代沢本先生宅に下宿していたことを覚えている。その頃か

大学をはじめこれまた数多を数え

ている。当然、海外に行かれることが多く、年に七、八回を数えることもしばしばである。

六月の総会の案内状を持って行ったのであるが、そんなわけで、生憎その頃は海外に行っているので出席できないとのこと。残念ではあるがこれまた止むを得ない。五四季会は、佐野圭司君を級友にもったことを誇りに思い、「世界の佐野」として、今後共立派な仕事を続けられることを願うと同時に、健康には一層の留意をされて、いつまでも元気でおられることを切に祈る次第である。

五五回

(庵原梯次)

内藤秀夫君のこと

相川君から、「会報」に何か、といわれ、とっさに「内藤のことを書こう」と答えた。先年、畏師松永先生の葬儀に列した折、木村(大塚)康宏君、相川富士雄君等と来し方行く末を語り合ったとき、話は自然に若くして死んだ友、内藤秀雄君のことに及んだからである。

ここで敢えて、内藤秀雄、と書く。内藤君とは書かない。われわれの青春は彼とともにあったし、そこではお互いに君づけでは呼び

合わなかったからである。その意味では冒頭の相川君、木村康宏君も、相川、大塚と呼び捨てにさせていたたけよう。

「人はあれども故人なし」とはセネカの言葉である。莫逆の友、内藤秀雄が他界してからもう三十九年経った。あれからいろいろなことがあったが、また別の意味では何もなかったといえないこともない。彼が命運えたのは、四八年(S23)七月四日、暑熱の日のことだった。当時のわたしは、いや、われわれは何よりも彼を喪った心の空虚さを噛みしめていた。何で彼がわれわれよりも先に、心身ともに健やかだった彼が――

その年の春、彼とともに賤機山の一本松のところで花見をしていたとき、彼はわたくしに、どうもこの二、三日、下腹が痛いんだがと訴えた。何時にないことだった。それから間もなく司馬病院に入院、開腹したが、結局、南支戦線から背負ってきたアミイバ赤痢からの肉腫だったとのことで、そのまま縫合、退院して自宅で死を待つばかりになってしまったのである。

しかし彼は最後迄生きる望みを捨てなかった。日々瘦せ細って

行く彼を見ているのはつらいことだったが、祖母さんが泣かれたのを見て、おれは死なない、と怒ったそうである。それだけではない。その年の三月以来病んでいた相川が見舞に來たのを見て、そのことをこそ心配していた。帰路われわれは夜道を歩きながら暗然として、何で内藤が、内藤が何で、と繰返すだけだった。彼はかつて戦地に赴くとき、冬の星オリオンを見たらおれのことを思い出してくれ、といっていたのだが――

追憶はさまざまの断片を鮮やかに描き出す。かつて五月の鯨ヶ池のほとりで彼は「ゆらく麦」と歌った。彼ほど、麦秋、という言葉の的確に使ったものはいない。その年の三月、真富士の山嶺では粉雪が降った。歩きながら彼は何やら哲学めいたことをぶつぶつとやっていたが、話の内容はいまとなつては思い出せない。しかし大事なのは彼が何やらつぶやいたということなのであって、ここに内藤の全人格が投影する。おそらく彼はつぶやくことによつて己が精神の方法について執拗に問い続けているのに違いないのだ。わたくしは今でもそうだったと思つてい

る。また秋深く、相川、大塚などと

ともに松永先生宅を訪れ、(先生も既に故人となられたが)話は夜半に及んだことも屢々だった。帰路夜更けた浅間神社の境内で、彼はおのが勉強のことをいい、イロニイに真実の想いをこめて、おれはやるぞ、と叫んだりした。――いまのわたくしは、三十余年の年月を逆行して、ときどきふつと十七才の彼と話しているのを感じることがある。それは不思議に稀薄なゾオンであるが、真実の響きを漂わせている……

いまでもわたくしは、われわれは彼と友人だった、と素直に語る事ができる。――わが友、内藤よ、何よりもお前は――いや、三十余年を経たいまでも、お前はいつものように笑つてわれわれをむかえてくれるか。

五六回

(武井富夫)

二十一年後、又、
その二十一年後

去る昭和三十一年の秋、ところは上野池ノ端の法華クラブ、大野君等の肝煎りで、卒業後二十一年にして初めてクラス会を催したと

きのことである。その後は、おおむね定期的にクラス会を催しており、お互いに顔を見馴れてしまったから、別に、なんとも思わなくなった。

そして又二十一年経過。この確を起すに當つて、そのときの写真をとり出して見て愕然となった。

あのときのコワイおじさん達も今から見れば、実にみんな若々しいのだ。だいいち、もう鬼籍に入つて久しい伴暢豪君が元氣な顔で写つていゝではないか。

昨年のクラス会には珍らしくも篠原水穂君が出席したのだが、今思えば、お別れのために来たかのごとくで、この春、倏忽として世を去ってしまった。吉川善吉君の計におどろいたのが、つい昨年の初秋のこと。重なるショックである。明日はわが身のことかも知れないのだ。噫、年々歳々……

これはいかん。はなしが少々しめっぽくなつた。この辺で話頭を転ずることしよう。

去年のクラス会は十一月五日、場所は銀座日航ホテルで、出席者は十六名。みんな偉い人ばかりだ

から疎漏のないようにせよ、と萩原達雄君が支配人をおどかしたので、山海の珍味が卓一杯に盛りられ肉山脯林の感があつた。

私もエライ人の仲間に入れてもらえたことを大いに感謝した次第であるが、エライ人達はみんな話に夢中になって、折角の御馳走もだいぶ余っていた。いまおもえば実にもったいない。

常連の奥野、成田両君が欠席というのは、当てが外れて思わぬ失点のように感じたが、小坂君が病いえて顔を見せてくれたのはうれしかった。出席者氏名は次の通り。(敬称略)

青木良文、小坂椰子朗、篠原水穂、清水逸郎、杉原泰二、中村治郎、萩原仁、萩原達雄、萩原文平、橋本保二、原敏彦、牧大(旧姓北原)勝三、松田一郎、山田隆、横森桂、佐野豊彦、

われわれの仲間も今年と来年にわたって還暦を迎える。平均年齢が八十才に迫ろうという御時世に還暦なぞ物の数ではない。

だが、これからさしかかる六十路の坂が難所のひとつであることもたしかなのである。ここを越すと、ぐつと長寿が期待できる、ということだ。

でも、これから、さらに二十一

年はムリかな?

——諸兄の健康を祈る——

(佐野豊彦)

六二・六三回

62 63 回生同期会 東京で開催
名簿も発行 次回は修善寺一泊

昭和五十八年二月十八日(金)

午後六時から、東京大手町の竹橋会館で、62 63 回生の同期会が開催された。昨五十七年六月に静岡で開催されたのを機に、久しぶりに東京でも、と言うことになり、静岡をはじめ、名古屋・福井等からもとんで来て五十八名が参加し、盛大であった。

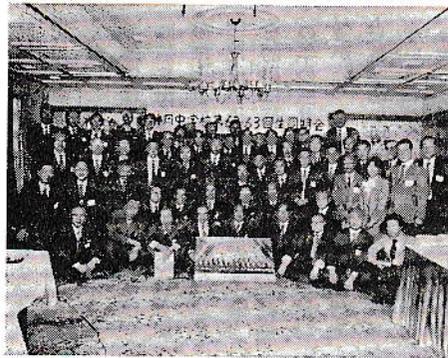
卒業以来という顔があちこちに見られ、校歌応援歌の BGM が流れ、なつかしい郷土の観光ポスターのはられた会場は、久淵を紋ず会話に満ちあふれた。

昭和二十二年二月十五日に、浅間神社百段で撮った卒業写真が全紙大に引き伸ばされ、名前がつけられているのを食い入るように眺めている人がいる。当時のスナップ写真も何枚か展示されたが、戦中戦後の混乱期のため余りにも少ない当時の資料である。

今回は出席者が全員マイクを持って演壇に上ってスピーチ、夫々

の顔写真もパッチリ撮って記録に残すことにした。限られた時間でのスピーチであったが、一人一人がまざまざと三十五年前の面影を思い起し自分の雑名を堂々と披露しながら懐しむ有様は、同期会ならではのと思わせるひとときであった。

●やあ皆さん、出世競争ご苦労



さんでした(笑) //

●よい子悪い子普通の子というテレビがあるが、私は昔からずーっとよい子でした。文句のある人は表へ出て貰いましょう(笑) //

●静中時代は、山の中腹から青々とした麦畑をみるような、なつかしい感じですよ //

●空襲で静中の校舎が焼け落ち

るのをこの目で見ました //

●戦後、中等野球が再開された喜びは今だに感激を覚えます //

●医者をやっていますが、皆さんも年を取って病気の人もいいると思うので、どうぞいつでもご利用下さい(笑) //

●昨年一年間トレーニングで狭心症を克服、五十代でも鍛えられる事を実証しました //

●なるべく医者にかからないで(笑) 長生きしよう //

●死ぬ時は、にっこり笑って、出来ればこの中の誰かを思い出して死ぬような、そういううつきあいをこれからしたいと思います(スピーチ録音テープ有り、幹事まで) //

なつかしい顔、声、思い出に時はアツという間に過ぎ去り、校歌をうたい、万歳を三唱して、賑やかに散会していった。

今回の同期会を機に名簿も整備され、盛り上った同期会を更に発展させるため、次回は静岡と東京の合同で、伊豆修善寺の「のだや去留庵」で一泊同期会をやりとうという計画が進んでいる。「のだや去留庵」は、同期の野田幹郎君の生家であり、野田君から歓迎の辞

も寄せられている。

果たし得なかった修学旅行の思い出を、修善寺温泉にするす事になるか! 感慨深い事ではある。(伊東守)

六六回

昭和五十七年十一月五日、66期静岡関東同期会が田中俊男、山下智康の両兄のお世話で、新橋「太平洋」で開かれました。集まったのはこの他、大坪、山梨、湯浅、辻、尾入、曾根、三原、石川、大村、河守、山本俊の諸兄、それに村松の十四名。

この会は十一月第一金曜日に開かれることになっており、毎回出席という常連もありますが、中には卒業後始めて再会という顔もあり、なつかしく歓談に時を過ぎました。一人々々近況を報告し合いましたが、この一、二年で勤め先や仕事を変った人が少なくなく、五十才前後はやはり一つの転機ではないかと思われました。お互いに仕事だけでなく、スポーツや遊びにはげんで健康を保ち、来年もぜひ再会することを約してこの名残惜しい会を閉じました。(村松武司)



66回同期会

右より前列 大坪、湯浅、尾入、三原、大村、山本
後列 山下、山梨、辻、曾根、石川、河守、村松、田中
(新橋・大洋)

六八回

同窓同業者

私たち68期にはどういうわけかお医者と銀行屋さんが多い。体がガタがきはじめているので医者が多いのは心強い。歯がダメになっただらあいつのところへ行こう、眼にきたらこいつの世話になると、眼ひそかに考えている。歯と眼の先

はもう体力の限界とあきらめる。ちょっとした集まりでも医者が銀行のどちらかが必ず混っているの、どっちへ転んでもまず安心。話は同じ職業のことである。ちょっと古い話だが、警視庁の記者クラブの一つである「七社会」で「異変」が起こったことがある。ここに静高出身者がずらりと顔をそろえたのだ。同じ大学出身者と

いうのは、さして珍しくもないことだが、高校の同窓というのは前代未聞である。

警視庁にはこの七社会と「警視庁記者クラブ」「警視庁ニュース記者会」の三つの記者クラブがあるが、メインはやはり朝日、毎日読売、東京、日経、共同通信が加盟している七社会である。私がおこに籍を置いていたのは四十一年から四十七年までと、五十四年から五十五年にかけての二回、延べ七年半ほどである。

四十一年に私がここへ足を踏み入れた時の日経のキャップに大石脩而さん(67期)がいた。次ぎが私で68期、読売には私と同じ捜査一課(殺人など兇悪犯罪)担当の伏見勝君(72期)、朝日には公安警備担当の富永久雄君(75期)がいた。やがて大石さんは警視庁を「卒業」し、代わって若手の北原保之君(76期)が捜一担当で入ってきた。静高ではないが、毎日には城内東小(今の青葉小)で私より一年後輩がいることもわかった。こうなる「静岡閥」である。

当局側が恐れをなしたかどうか定はかではないが、少くとも、うつかり静岡の悪口はいえない、というムードになったことだけは確かである。それにしても、一カ所

にこれだけの静高一門がそろったというのは極めて珍しい。

当時は三億円事件、一〇八連続射殺魔事件、大久保事件などの兇悪犯罪のほか、東大安田講堂占拠やハガチー事件など70年安保がらみの事件が相次ぎ、やたらめったら忙しい時期だった。そのとどめが浅間山荘事件である。

私たちが鼻を高くしたのは静高の文武両道である。大学入試シーズンに売り出される週刊誌を買ってきては「おう、ウチは東大にならん人、京大にならん人……」などと声高にやっていると、みんなたいていいやな顔をして避けて通る。夏は野球である。静岡勢にふたんこみやられていけるせいか、甲子園が始まると、やたらアンチ静岡が増える。それでも勝ち進む。「みたか、みたか」である。

ついにはたまりかねた一人が甲子園まで応援に行ってしまった。彼が行ったせいとか、とたんに敗退。帰ってきたら「向こうで臨時後援会費を募っていたから立て替えてきた。一人五千両ずつ」といって手を出した。「チェッ、余計なことしやがって。俺たちのこと、黙ってりゃあわからねえの」とブツブツ。金を出さ段になると、勝手に静岡出身じゃないみたいにな

顔をする者もいたが、それでも出すものは出したような気がする。

五十四年にキャップとして再び警視庁に戻った時、伏見君もキャップで、静高閥は息づいていた。当局側にも、東京サミットを指揮した長倉慎一君(71期、現警視庁災害対策官・警視長)が警備一課長として活躍中で、大いに意気があがったものである。

同窓といっても仕事は仕事。事件が発生すれば互いに商売仇として、シヤカリキになったものである。しかし、どういうわけか抜かれる時は、同窓生、いつも一緒だった。(萩原多賀男)

七三回

卒業二十五周年記念

「故郷は、遠きにありておもうもの」だとか。だが、デリカシーに欠ける私共にとっては、さしづめ「故郷はドブブリつかっておもうもの」といったところかもしれない。その点今回の集りは、静岡という銘酒に加えて懐しい恩師と多くの友人達といった旨い肴にめぐまれ、文学通りドブブリと故郷の良さにつかることが出来た。

昨年この頃からか、誰れともなく「我々が静岡を卒業して今年は二十五周年目だぞ」といはいはじ

るや、お祭り好きな連中のごと、翌年、すなわち今年が猪年だからでもなからうが、二十五周年記念へとまっしぐらに突走ったのである。とはいふものの、当日に至る迄には問題がなかったわけでは無い。

例えば場所の選定であるが、当初は我々が考えるのであれば当然かつ平凡、低俗的ながら『あの熱海』であった。理由は、さも最もらしく東京と静岡の中間というところである。気が早いことに、熱海にある数軒の宿から見積書までとる周到さであった。が、しかし過去の貴重な経験から、彼等をニカク姿にしたら最後、『神聖』であるべき二十五周年記念行事の先行きがどうなるかは火を見るよりあきらかなこと、説得に説得を重ね最も無難な静岡に落着いたのである。

さて十一月十三日は素晴らしい秋晴れであった。会場の中島屋には定刻の五時を待ちわびるかの様に四時頃から会場のあちこちでお互いをなつかしむ光景と談笑が交ざれ始めた。しかしながら時々、いや時々といわないまでも二年あるいは三年に一度でも会っている連中は別にして、実に二十五年振りの再会もあるわけで、その場合は

なかなかニューモラスである。つまり人間の肉体的外見は自分達が考えているよりははるかに進化、いや変化するらしく、あまりの変化に相手がわからず、とはいえず「君は誰だっけ」なんて失礼なことには決していいはないで、「久しぶりだな。元気かい。あまり変ってないじゃないか」なんて調子のいいことおびたいたい。なんとか名刺をもらおうとするじらしさ。しかし、そこはそれ同級生であったという事実が二十五年という歳月のすべてを流し去り、あの日あの時の友情にもどしてくれることは実に素晴らしいことである。

さて、当日のメインゲストは吉川先生を始め北川、湯沢、平岩の諸先生である。各先生からどこかの中学、高校生に聞かせてやりたいたい程情熱あふれるスピーチをいただき、会は一層の盛り上りをみせた。当日の出席者は一〇四名、地元及び関東支部は無論、名古屋から鈴木、遠く九州から仲川がかけつけ、その上、すっかり良妻賢母ぶりが板についた女性が七名、会に花をそえてくれた。歌の文句じやないが、貴方の過去など知り過ぎた連中の集りである。ばれてしまっていることへの居直りか、皆が本音でものをいいあえる雰囲気

が充滿している。話しは変わるが、私は当日迄大変な勘違いをしていた事に気がついた。それは、我々日本人が医学界に最も強く求めていたものが、ガンの特効薬でもなければ心臓病治療薬の開発でもなかったことだ。当日出席の我々の仲間である医師又は製薬会社員に対する彼等の切実な声は、ガン・心臓病対策よりも、先ずハゲ治療薬の早期開発を認識し、総力をあげて国民の持つ精神的・肉体的悩みの解消にあたらねばなるまい。

冗談はともかく、今この原稿をロンドンヒースローからアンカレッジの機内で書いているのだが、昨夜ロンドンのバブ、シャールックホームズでの光景が思い出されてならない。そこシャールックは、古いフロアーの中心に円型のカウンターがあり、客は思い思いの場所でグラスを手に立ったまま談笑したり、一人でカウンターによりかかって飲んでいる者もいて、広さ五十坪ぐらいの典型的なイギリスのバブである。昔、この片隅でコナンドイルがシャールックホームズを書いたという。と、突然、そこに老紳士を先頭に約三十名程の若者のグループが元氣よく

入ってきた。直感で、同窓の連中だということがわかる。他の客も、彼等の為にごく自然にスペースをあけてやる。彼等は大声で歌い、かつ飲み始めるのだが、他の客は全く意とせず各々マイペースで飲んでいる。多分、彼等は二十七、八才になってハイスクール時代の教師を囲んで一次会から流れてきたのだろう。話しの内容は我々と同じくバカバカしい。いずこも同じかとなんとなく安心し、同期の懐しい面々が思い出された。

一方、我々の二十五周年会は、その夜どこへ流れていったのだろう。二次会、三次会迄の消息についてはある程度つかめているものの、その後については、全く不明であるが、誰にとっても、その夜は青春を充分感じることの出来た『値千金の夜』であったはずだ。記念植樹も中島の担当で近日中には行はれる予定である。

私は成功というものを、自分にとって価値ある目標を前もって絶えず設定し、段階を追って実現することと考えます。ある小学二年生が、鉄道に乗って日本一周をしようとする目標をたて、時刻表の読み方から始め、費用を算出し、小遣やお年玉の貯金計画を立て、ついに四年生の時に弟を連れて日本一周を成し遂げたそうです。これは大変な成功だと思えます。このように成功は、年齢・性別や環境に関係なく、誰にでも身近なものです。大企業の経営者だけが成功者ではなく、目標の数だけ成功があり、達成できれば、その数だけ成功者が存在するのです。大切なことは、自分にとって価値ある目標をどうやって設定するかです。

私は以下のようにして目標を造り出します。まず私の人生を、健康面、精神面、教養面、家庭生活面、経済面(ビジネスを含む)に分けます。現在好ましくないので直したいものを一の欄に記入し、好ましいことなので促したいものを十の欄に記入します。各分野の

※会の世話人
(静岡) 吉見、増田、高須、西谷
(関東) 佐々木、三枝、近藤、古井
(中西英一)

八七回

名真傑天駆(ナマケッテン)のチャレンジ・マイ・サクセスフル・ライフ

私は成功というものを、自分にとって価値ある目標を前もって絶えず設定し、段階を追って実現することと考えます。ある小学二年生が、鉄道に乗って日本一周をしようとする目標をたて、時刻表の読み方から始め、費用を算出し、小遣やお年玉の貯金計画を立て、ついに四年生の時に弟を連れて日本一周を成し遂げたそうです。これは大変な成功だと思えます。このように成功は、年齢・性別や環境に関係なく、誰にでも身近なものです。大企業の経営者だけが成功者ではなく、目標の数だけ成功があり、達成できれば、その数だけ成功者が存在するのです。大切なことは、自分にとって価値ある目標をどうやって設定するかです。

の十一欄別に優先順位をつけま
す。しかも、それぞれの項目すべ
てに、自分の言葉で積極的な宣言
例えば「…を必ずするぞ」とか、
「…はしないようにするぞ」を付
記しておきます。次に、五分野全
体を通して大切なこと、価値ある
ことを優先順位をつけて目標とし
て選び出します。そして、それら
の目標を、短期・中期・長期に分
けて書き出し、それぞれに①その
目標を達成できたときの報酬(有
形・無形)②目標の達成を妨げる
もの(有形・無形)③問題点の解
決案④解決策の実行期限⑤目標達
成の期限を書き込みます。もし具
体的にビジネスアライズできるもの
があればポスターでも模型でもい
いでその身近に置いておいて下
さい。イメージが、具体的であれ
ばある程有効です。

これらの作業はかなり面倒です
が、自分の心の中のこと、紙面を
通してかなり明らかになります。
そして、今、自分はどこに居て、
どこに向って進もうとしているの
か、どの道を選べばいいのか、そ
のためにはまず最初に何をすれば
いいのか、明確になってきます。
皆さん、ミスター可能性からの
テイク・オフは、まず小さな身近
な目標設定↓目標達成↓次のレベ

ルの目標設定↓目標達成の連続に
より、ミスター実績となること
です。成功はより大きな成功の母で
あると言えます。私と一緒に、ミ
スター・サクセス・ビルダーを目
指しましょう。

私が今まで自分を励ましたり、
戒めたりしてきた言葉や考え方を
プレゼントします。

・自分がどこに行こうとしている
のかを知っている人には、全世界
が道を開けてくれますが、他人に
道を選んでもらった人には、気持
よく道を開けてくれない。

・この世にある豊かさをどのよう
に得るかは、その人の選択にかか
っている。生まれつきの運命など
はなく、その人がどの運命を選択
したかだけのことであり、人間は
意志次第で結果を選ぶことができ
る。現在の状態は、過去の選択の

村松 喬君のこと

山 田 喜志夫(50回)

大正の末期から昭和九年迄、即
ち清水市立か町立の小学校時代と
静岡四年生迄、私は彼と同窓であ
った。

当時の清水の町は、港町特有の

結果である。自分がどのような人
間になるのかを自ら決意するこ
とが必要である。大切なのは、
からの自由でなく、への自由で
ある。成功しようと思えば良
いのだ。その決意をはぐむモチ
ベーションが十分に強力ならば、
この世のいかなる力もそれを止め
ることはできない。考え方を変え
ればいいのです。そうすれば周囲
の条件がたちまち変わってきます。

最後に一言、人物を目指しまし
よう。自分だけの成功だけではさ
みしいです。自分だけの心配では
なく、何十人、何百人、何万人の
面倒をみることを心がけましょ
う。人材とは自分をモチベートし
ている人ではないでしょうか。私
たちが目指す人物とは、自分のぐ
るりの人もモチベートできる人で
はないでしょうか。(薬科名雄)

貧しさと風景の良さが混在する小
さな都会であった。小学校低学年
の記念写真を見ると、小学生の大
半が和服姿で、その中で医師と地
主と洋服屋の息子等だけが洋服姿

である。その田舎町に全く都会的
容姿をした村松君が、存在してい
た訳である。小学校から四人だけ
が静岡中学に入學して毎日静岡電
鉄で通学していた。

ご承知のように、彼は当時既に
知名の小説、伝記作家の村松梢風
氏の三男である。二人の兄、弟も
それぞれ静岡中に在學し、資質的
にも大変きわだったファミリーとし
てわれわれの羨望の的であった。

小学校時代は、わがクラスの級
長であったし、その成績、特に作
文は巧みであったが、それ以上に
彼のもつ独特の風格、人柄が数多
くのファンを魅きつけていた。

中学四年で早大英文科に入學
し、清水、静岡を去って行った訳
だが、私達は取残された一種の虚
脱感をうけたことを想い出す。

大学を卒業して毎日新聞に入社
し、第二次大戦を迎えて、ファイリ
ッピン戦争に従軍、当時村松報道
員としての数々のニュースを紙上
に見ることが出来た。戦争中病を
得て帰国した。

戦後しばらくして、名古屋市の
都市計画を取材し、「金の鯨」と
いう著書がある。荒廃した名古屋
の町に、日本で唯一の近代的大都
市計画を樹立し、且実施した二人
の技術者と市助役の熱意と努力を

詳細に記述した書である。一読し
て村松喬君の硬い真面目さに接し
た思いが残った。

ご承知の通り彼の父村松梢風氏
は、浅草・玉の井に生きた永井荷
風氏に対して銀座・日劇ミュージ
ックホールの歌文学者として知ら
れているが、他面「本朝画人伝」
の如き極めて真面目な伝記作家で
もあった。村松喬君のこの本はそ
の一面を承けついでいるものと思
われる。

二十年近く前、私は仮の住居の
大森で彼の標札を見て、その家を
訪れ何年ぶりで彼に再会した。
彼は当時日本の学校教育に想を馳
せていた。私は娘の中学生と息子
をもつていたので、戦後の教育に
ついて、しばしば語り合ったもの
である。

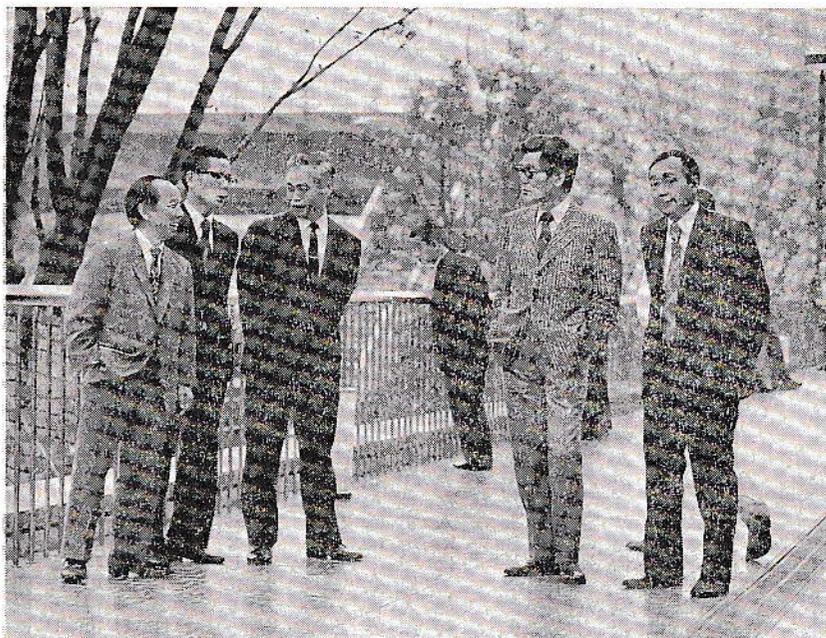
やがて彼は、「教育の森」とい
う標題で、全国にその生きた資料
を集め乍ら、教育評論を書きつづ
けた。毎日新聞のビルの一室に、
何人かの協力記者を配置した同名
のセクションが設けられた。

ついに彼は生涯の事業目標をつ
かみ、すべてをそこに傾注したの
である。

教育評論家村松喬の地歩は確立
した。静岡中学・高校一〇〇周年
記念には父梢風氏の七五周年記念

講演に次ぐ親子二代の同一中学の記念講演となった訳である。その後私も彼も転居して、やや無音に過ぎた。

昨年十二月二十一日青山斎場にて、既に幽明境を異にした村松君の写真に対面できたのは、新聞にのった彼の訃報によるものであつた。



永年の友を失い、静中時代に経験した虚脱感に似た寂寥に浸る想いで彼の冥福を祈るものである。

(編集部) 生前の村松氏を偲び、ここに、創刊号に寄せられた五〇回の「各期便り」を掲載して、故人のご冥福をお祈りいたします。

私たちは旧制静岡中学の五十年生、昭和五年に入學、昭和十年の卒業生である。この間、第一次上海事件、満洲事変などが起こり、十五年戦争の幕が上がっていたわけだが、中学生たちはまだのんびりしていた。

当時の静岡の校舎は木造の古いもので、いま思ひ出すとなかなか味のある建物だった。春は桜の老木が若返って校庭を眠たげに色どり、冬は澄んだ空気の彼方に白雪の富士が浮かび上がったものだが、校舎は戦災で焼けた。

この五人のうち、私を除く四人は優等生だった。私は数学がニガ手で劣等生。四年が終わると五年を放棄して早稲田の文科へ逃げこんだが、彼らはガッチリ五年生をやリ、高校から東大へ進んだ。

だが、いま私が「東大撲滅論者」なのは、彼らへのヒガミからではない。私たちのころは、だいたい劣等生の方が幅をきかせて威張っていたのである。(村松喬記)

(写真右より) 三井不動産常務取締役山田喜志夫 評論家村松喬 東京大学教授梅村魁 農林省農業技術研究所長江川友治 東京大学教授丸尾文治

(写真と文は文芸春秋より)

アルジェリアレポート

影山 浩 (48回)

昭和五十三年八月×日真昼間の十二時、私はアルジェリア国アンナバの飛行場に降り立ちました。その瞬間、遠くサハラ砂漠から吹き送られて来るといふ熱風がひりひりと頬を焼かれる様な思ひでした。

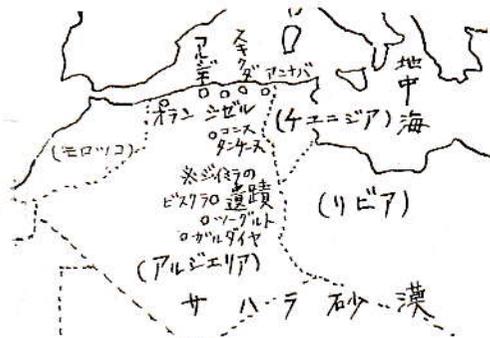
本の庭園を想わせる色とりどりの植木や草花があでやかに植え込まれて居り、殊に芭蕉の大樹が官舎の二階を遙かに抜いて亭々とそそり立つさまは、如何にもアフリカにふさわしい眺めです。

我々の入る宿舎は、如何にもフランスの旧植民地を想わせる白壁の家が立ち並んだ街の一角に在ります。宿舎の斜め向いに在るこの国の公務員宿舎には、さながら日

夜中の十二時にふと眼が覚めました。町の中心から湧き上って来る様な銅鑼の響き、人の呼び声とコーラン(イスラム教のお経)を唱える澄み通った声は渦を巻いた様に宿舎の五階迄上って来て、まるで映画で見るアフリカの奥地にも来た様な錯覚を覚えました。

後から聞けば、翌日から始まるラマダン(イスラム教徒の断食月)に備えて夜中賑やかに騒ぐ彼等の風習との事でした。

私は昭和五十三年から足掛け四年、フランス語通訳としてアルジェリア各地のプラントで働いて来ました。同地に出掛ける前は、殆どどの日本の方々と同じく、私も亦、アフリカとは砂漠に夕日の沈む所、猛獣・毒蛇・鱷の跳梁跋扈する所位の知識しかありませんでした。然し、地中海沿岸に沿った



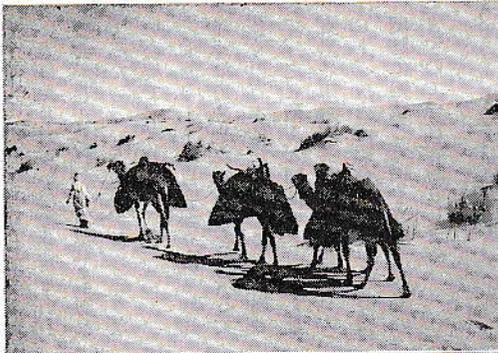
所謂グリーンベルト地帯に限って
 言えば、滴る様な緑が有り、そこ
 に住む人達は、日本人とさして皮
 膚の色も違わず、程度の差こそあ
 り、文化生活を営んでいると知っ
 たとき！

発展途上国の一員として今日そ
 の近代工業化に営々として力を注
 いでいる此の国は、技術援助の多
 くを日本に仰いでいますが、その
 割には、その実態は知られていま
 せん。私の垣間見たアルジェリア
 を、誌上を借りて少しお伝えしま
 しょう。

其の年の初秋、偶々の連休を利
 用して、私は勤め先の人達と、ジ
 イミラの遺蹟へ車で小旅行を試
 みました。羊や山羊が群れを成し
 て放牧され、あたかも黄色い小麦
 粉を撒き散らした様なカラフルな
 原野を、いくつもの越えま
 す。或る所では、その草原の上を
 鷓鴣が二羽三羽ゆるやかに舞い、或
 る所では驢馬や牛がのんびりと草
 を喰んでいます。そして、日が漸
 く西に傾き掛けた頃、我々は目指
 す遺蹟に到着しました。広々とし
 た廢墟の中には、右を見れば石段
 を積み上げた観客席を持つ円形の
 野外劇場あり、公衆浴場あり、左
 を見れば市場あり、礼拝堂あり、
 そして、中央にはアーチ型の壮大

な城門ありといった具合です。
 更に、それ等建造物を結んで、
 年古りた石畳道が縦横に走り、そ

の下には下水道が掘削されている
 事を示す穴の明いたマンホールの
 石蓋が点々と見られます。之等の



建物、遠い紀元一〜二世紀の昔
 ローマ帝国華やかなりし頃、此の
 地を支配していたローマ軍に依っ
 て建てられたものだ相ですが、そ
 の廢墟が今ここに掘り起こされ、
 秋の目差しを一杯に浴びて寂とし
 て静まり返っているのです。

晩秋の十一月の休日の午後、私
 はブラリとアンナバの町なかへ散
 歩に出掛けました。そして人々の
 さんざめく賑やかな大通りに沿っ
 て歩いていましたら、結婚式場に
 急ぐ数台の車が通り過ぎるのに出
 会いました。ボディの先端に色取
 りどりの季節の花をくくりつけ、
 更に、その先に巻き付けたローズ
 色の二本のリボンの風に靡かせ乍
 ら、車の列は軽快なメロデーの
 警笛をビポービポーと鳴らし鳴ら
 し走り去りました。先頭の車には
 真白なドレスをまとった花嫁が座
 り、それに続く二台目の車には、
 ブルーのスーツを着た小肥りの婦
 人が手拍子を取りながら陽気に歌
 っている様子が走り去る車窓に一
 瞬眺められました。花嫁の母親だ
 ったのでしょうか。

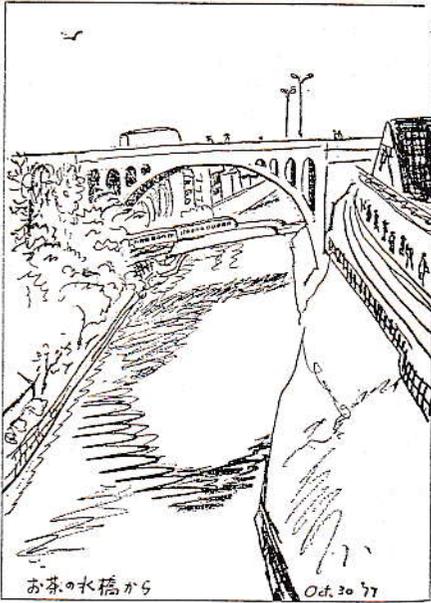
五十七年の正月休みを利用して
 私達はサハラ砂漠への旅に出掛け
 ました。
 砂漠がそこから初まる町と云わ
 れるビスクラで小憩を取りました

が、そこには薬椰子の市が立ち黄
 褐色に輝くダーツ(なつめ椰子の
 実)が商家の軒から軒の店先に山
 の様に積まれています。其の道路
 脇に生い繁る芭蕉の大樹の葉蔭に
 は、床屋が椅子を持ち出している
 びりとお客の頭を刈っています。

又、其の横の路上には、喫茶店の
 出店があって、古びたテーブルと
 椅子が四、五脚並べられ、コーヒ
 ーがサービスされていました。

アフリカに來たら一遍は訪ね度
 いと願っていたサハラ砂漠にと
 う着きました。滑らかな起伏を
 持った砂丘がうねりうねりなが
 ら浪を打った様にどこ迄もどこ迄も
 続いています。手の平からサラサ
 ラサラとこぼれ落ちる砂は、精選
 された赤ざらめの様です。いつか
 夕方になっていました。今、地平
 線に大きな大きな真赤に燃える太
 陽が沈んで行きます。皆、一言も
 言わず、遙かな地の果てを向いて
 じっと立ちつくしています。時が
 一瞬そこに静止してしまっただか
 らに……。

翌日私達は砂漠の町ツィグルト
 を後にして歸路に就きましたが、
 砂漠地帯から所謂「土漠」(未だ
 砂漠になりきっていないで、所々
 に草の残っている亜砂漠地域)へ
 掛る頃、七〜八頭の駱駝を連れた



お茶の水橋から Oct. 30 '77

(註) スケッチの中央のアーチは「聖橋」その下に地下鉄丸の内線の鉄橋、右側は国電お茶の水駅のホーム。鉄道、地下鉄、車道、歩道の立体交差は、世界でも唯一とか。(スケッチも67期朝倉勇氏)

神田川と私

朝倉 勇 (67回)

ターバンに白衣裳の若い牧童に出会いました。年の頃二十前後でしょうが、その精悍な牧童の澄み切った眼差しとキリッと結んだその口許からは、新興の国造りに燃えるアラブの若人を強く印象付けられて、いつ迄も深く心に残り残りました。

誠に不思議な国です、——この地中海一つ越えたアフリカのマグレブ・ノバ、アルジェリアは。我々日本人の生活次元を越えたさまざまな生活レベル、それに加えて

旅する人々を魅了し尽してやまない大自然の大らかな移り変り……機会が与えられたら何遍でも訪れてみたいというのが、私の偽りない心境です。

お断り——私自身余りにも無知だったアフリカの実態を出来る丈多くの方々に知って頂くと思つて、之と殆んど同文のレポートを東京外国語大学、新日本証券、フレイバ技術研究会のそれぞれの機関誌に掲載して頂く事になりますので一言お断りします。

高層ビルが建つようになって、東京にも新しい都市空間が生まれつつある。しかし、都市の美という点でみれば、その第一に挙げられるのは、皇居、その堀をテーマとする一部になるだろう。これは東京人がつくったものではない。江戸の遺産である。

そんな東京でも長く住んでいると愛着は増すもので、とくに私は芝公園で育ったから、いわゆるふるさとといえはいきおい東京ということになる。小学生のころは夏休みごとに静岡市で過ごし、やがて疎開。そして静岡へということになった。静岡は第二のふるさとになった。

鉄丸の内線を利用して。だから毎日のように神田川を渡っていたわけだ。

しかし、ある日までは格別に神田川を気にもとめずに過ごしていた。があるとき、電車の窓から川をみて、ふと小さなメモにつづった。次の日も川をみてメモ。というようなことが四、五日つづくと、もう止められない気分になった。そうして私は自分に、ひとつの約束ごとを課していた。それは、電車で神田川を渡るときは、必ず川のメモをすること。上り電車ならば銀座駅、下り電車ならば新大塚駅に着くまでに書いてしまふこと、というのである。

この作業は、一年をこえた。正直、しんどい日もあった。が多くの日は、川をみるのは楽しみだった。一日一日、新しい川に出会う。親しい仲間に出会うような気持ちだった。冬があり、春がきて、夏。そして二度目の秋となり寒々としたある日、私はこの作業を止めた。その日、私の好きな俳優ジャン・ギャパンが死んだのだ。

日々のメモは、わずかな長さのものである。しかし、そんな短文も一年間となると、かなりの量になる。これらの短詩は、私が所属している詩の会の、月刊「歷程」

に、主なものを発表した。意外なほど反響があった。車窓から見える川の表情や光景を、見たその場で言葉におきかえるのである。

「そこに現われては消える川と船と橋と人と木と草と石、それだけをその場でメモする。いわば、言葉の早撮り写真。それが一年間ぶん集まったものが、本書となる」と、宗左近氏は本の帯を書いて下さった。

電車が川を渡るのは七秒ほどの短かい間だ。その短時間に、目にうつる事物を毎日積み重ねていったらどんなことになるか、この詩集はそんな実験をしたことにもなった。二、三をご披露しよう。

●一九七五年十月三十一日

金曜日 雨

川に雨が降っている
ちりめん模様の鉛色
だるま船が左の岸に
沈まんばかりの低い腰

(これが書きはじめた日のものだ)

●十二月七日 日曜日 雨が止む
左 十一時五十分

柳という木は

冬になっても葉が落ちない

二本の柳はつめたい空気の中で
みどり色の葉を垂らしている
雨は止んだ

義弟の許約者の兄さんに挨拶す
るために

銀座へ出てゆく

川岸に建つ家は
かき割りのように思えた

●六月四日 金曜日 はれ 左

窓からみる風景に
音がきこえた

ポートが川をのぼってきたのだ

電車の右の窓のすぐ下を
ド・ド・ド・ドッとやってくる

白いシャツの男の肩から腕
それがポートの左の窓にみえる

ポートがあと数メートルで地下
鉄鉄橋にかかるところで

電車は地下にもぐった
ド・ド・ド・ドッはきえて

電車がきしんだ

こんな具合につづけていると、
神田川に対する愛着は日ごとに増

してゆく。川を見るのが楽しみに
なり、川と私とはたがいにあいさ

つを交わしあう、そんな心情にな

ってゆくのだった。

引用が長くなるのでこのへんで
やめるが、この作業で私が体験し

たことはいろいろだ。まず、神田
川と親しくなれたことだ。特別、

関係もなかった川が、私にとって
の神田川となった。これは、私の

生活での大きな収穫だ。また、ど
んなささいなことでも、自分が主

体となつて目を向ければ発見があ
つておもしろいことも知った。人

生とは生きつづけることだろうか
ら、こうした行為は人生そのもの

にもなるだろう。わが街に、積極
的にかかわつてみると、張りあい

が出てくる。そういえば、ヨーロ
ッパの絵画には街の風景がじつに

よく出てくる。生活を描くという
ことが、芸術の基本にあるのでは

ないだろうか。
などなど。毎日の小さな作業か

ら、私は一冊の詩集をつくること
ができたし、多くの経験をした。

これらは、私がしてきた川へのあ
いさつに対する、神田川からの贈

りものであるのに違ない。

寄稿者

朝倉勇君のこと

「神田川と私」を寄稿してくれ

た朝倉勇君は、正式には67期とし

て静高を卒業してはいない。静岡中

学三年二組(湯原誠先生担任) 在

籍中、病に倒れ長期療養の生活を
送つたため、その後、療養のか

たわら一人で勉強し独力で今日の
地歩を固めたのだ。広告企画制作

の分野で能力を発揮して、斯界で
は名を知らぬ者はいないほどの実

力者となつており、現在でもオリ
ンパス光学工業、キリンビール、

シャープ、日本楽器、日本リクル
ートセンター等の広報活動に力を

そそぎ、正に東奔西走の毎日を送
っている。日本の高度成長期には

前述の企業のほか味の素、サッポ
ロビール、セイコー、ソニー、日

本航空、日本交通公社、ブリヂス
トンタイヤ、本田技研工業等の企

業イメージ造りに参画し、幾多の
広告賞・会員賞・部門賞を獲得し

ており、私たちは、知らぬうちに
新聞広告・テレビ・カタログ等で

彼の作品にお目にかかつていたわ
けである。

制作活動は、ライトパブリシテ
ィに十五年勤務の後、フリーラン

スを経て、株式会社パプロを設立
し株式会社マグナ代表取締役副社

長になる現在まで一貫しているの
であるが、その業務のかたわら、

草野心平が主宰し、西武グループ
の総帥・堤清二がベンネーム辻井

喬で寄稿しているなど、現代詩人

の集合体である月刊誌「歷程」の

同人として、詩の創作にも豊かな
才智を披露させており、詩壇にお

いての彼の名もまた有名である。
同人であるばかりでなく「歷程」

の編集人まで果たしている現在の
朝倉君の、詩人と企業人とを両立

させている活躍ぶりは、三十余年
前の療養中の面影などまったく払

しょくされている。白髪の偉丈夫
で別人の感が強い。眼光の輝きは

天性のものか。
一昨年「神田川を地下鉄丸の内

線電車が渡るとき」の記事を朝日
新聞で読み、朝倉君の所在が確認

出来て同窓会への加入が実現した
のだが、われわれ67期のみ喜び

ではなく、静中・静高関東同窓会
にとっても何よりのことと思つて

いる。昨年の総会には早速出席し
てくれて、同日開催した67期同窓

会でも三十五年ぶりに旧友と交歓
し、実のある話題を提供してくれ

た次第である。
傾歪ぶりは、草野心平門下だけ

あってさすがに一度じっくりお
試しあれ。(梶原由三)

広告募集にご協力ください
一マス一回一万円。あなたの協

力が、関東同窓会を永続発展さ
せる大きな力になります。

建築設計・監理

株式
会社

ユニオン設計センター

代表取締役 成岡英彦 (67回)

一級建築事務所登録7425号

東京都新宿区西新宿7-14-9 規格ビル

TEL 03-363-8604 (代表)

新東京印刷株式会社

代表取締役 梶原由三 (67回)

東京都中央区八丁堀2-1-7

神綱ビル

TEL 03-553-8981 (代表)

謎解きの随想

40 回野崎操一氏の著書「心の軌跡」から

編集委員 月見里 得知郎

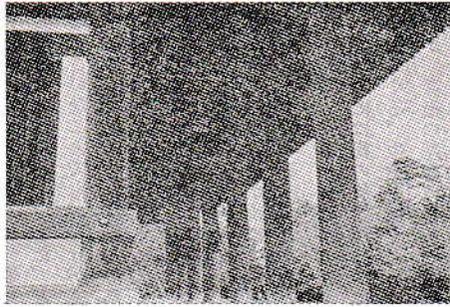
唐招提寺金堂の柱間

唐招提寺は天平文化の香り高い心鎮まるお寺である。創建発願をした鑑真和尚は渡航に五度も失敗をしながらも、東大寺の戒律師として赴任した。すでに盲目であったにも拘らず、唐招提寺を建立したのだが、随行の弟子の中に胡國人で如宝という建築家がいたと伝えられている。

この伽藍の中心、前列柱のある金堂は、何に譬えようもなく美しい姿である。歌人会津八一が、おほてらの まろきはしらものつきかげを つちにふみつものをこそおもへと詠じたのは、月光を浴びたこの柱である。ざらざらした柱の唐を無でると、風雪に耐え忍んだ千二百年の歳月と鑑真の苦難が掌に伝ってくるように感ぜられる。

「この金堂はギリシャのパルテノンによく似ている」と言われるが、両者の近似性に対する感嘆である。亀井勝一郎著『大和古寺

風物誌』を開くと、「希臘の神殿を彷彿せしめるような円柱の立並んだ金堂。私は写真の上で、遠い希臘羅馬の神殿の址にそそり立つ円柱をみたことがあるが、ああいふ石造の感じはどんなものであろうか。わが円柱は云うまでもなく



木造であるから、光りを反射することは少ない。八本の太柱の並んだ金堂を少々遠眼にみるときは、また別の美しさを感じる。屋根を支えるために建てた柱がこんなに陰翳や習いを生ずるのを私はいつも

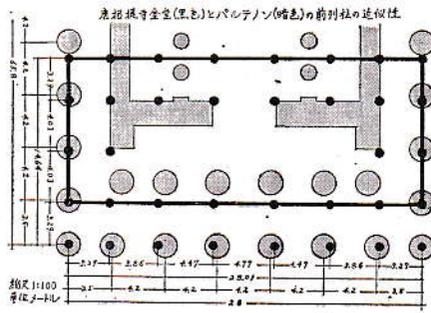
感嘆して思うのである」と書かれている。

和辻哲郎は『古寺巡礼』の中で「立ち並んだ八本の柱を、中央に於て最も広く、左右に至るに従って漸次相接近して立てている。その間隔の次第に狭まって行く割合が極めて的確に屋根の重量の増加の感じと相応じているのである。これらのことは精密な計算によって明らかにされるのであるかも知れない。例えば柱の間隔が左右に至るに従って狭まる率やその結果柱の支力が左右に至るに従って高まる率などは、数学的に計算し得られるであろう」とアーキテクトとその論旨を述べている。

唐招提寺金堂とパルテノンとは本当に似ているだろうか。似ているとするならば、双方の類似点と相違点を明らかにし、更に柱間の運減が無作為のものか、幾何学的な法則によるものか、また唐招提寺金堂に限らず、ギリシャおよび中国の建築についても普遍性があるか検討しなくてはならない。

柱間の運減に法則を求めようとすることは、ブルーノ・タウトが「パルテノンなど大聖堂を黄金分割の原理や三角測量によって測定し、あるいは研究しようとするのは、ある言語を文法の規則だけに

よって学ぶのと一般であろう。言語の規則はおびただしい例外を含むものである」と言っていることや、社寺建築の泰斗角南隆が「本来自由なるべき軒の反りを機械的方法で簡易に求めようとするとしても単に二次曲線のみにしようとすることは曲線の味に無理がある」と述べている思考方法に抵触するようであるが、建築は図面に基いて建造され、図面は定規と



コンパスで画かれるのであるから、円弧図法を否定することは、天才は別として不可能であろう。さて唐招提寺とパルテノンは共に宗教的古建築。その金堂は唐招提寺伽藍の中心の建物、紀元七七〇年代宝亀年間に創建の遺構であり、一方のパルテノンはアテネの

話題のスペース
(明治通りと大久保通りの交差点)

レストラン・モア

小人数から30名様くらいまでクラス会等に最適です

土屋 晃 康 (67回陸上)

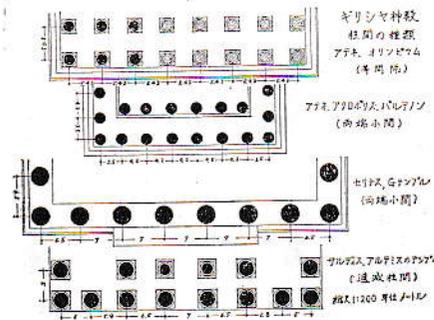
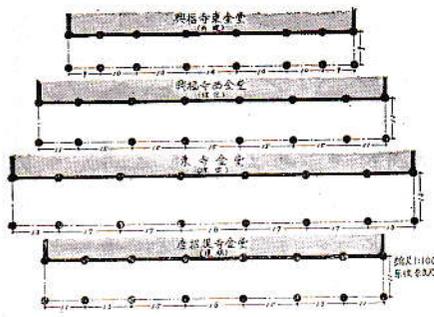
TEL 03-208-2931・204-1251
東京都新宿区大久保 2-1-3

同窓会コンベンなど、ご相談ください。

伊豆大仁カントリークラブ 伊豆大仁開発株式会社

代表取締役 石橋 正 秋
取締役支配人 安 田 正 弥 (66回)

静岡県田方郡大仁町浮橋字南松坂1198-1
TEL 0558-76-2401 (代表)



アクロポリスの中心の神殿で、紀元前四四七—四三二年の建造にかかる。吹放し前列柱によって建物に陰翳を与え、奥深さを感じせしめているのは共通した点である。柱は円柱で間口は七間であるから柱の数は八本となる。金堂の方は直径六〇センチの木造であるが、パルテノン直徑一・九メートルの石造で、太さと材質は異なる。偶然の一致かも知れないが、間口が双方二八メートルであることには一驚を喚せざるをえない。

柱のエンタシスについては、パルテノンでは底部の径一・八八メートル、下から五分の二の所で六センチ太くし、頂部の径一・四メートルである。日本建築でも法隆寺のように飛鳥時代にはエンタシスがなかったが、当寺建立の奈良時代には影をひそめた。金堂の柱の元口は末口よりも僅かに太いが、下部を削ってややエンタシスを持たせたのは近世の改変であると言われている。

双方の柱間が不等間隔である点は共通だが、パルテノンでは等間隔で両端のみ柱間を狭くしている。これに対して唐招提寺金堂は中央が最も広く、左に順次寸法が通減している。

吹放し前列柱をギリシヤ建築ではプロスタイルと言ひ、特に八本立をオクタスタイルと呼んでゐる。列柱の柱間は次の六種類に分けられる。

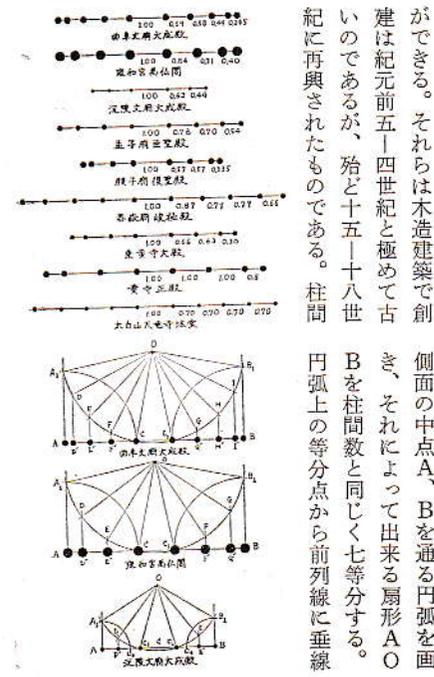
- 一、等間隔。これは全部柱間が等しく、同規格モジュールを形成している。
- 二、等間隔両端小間。両端のみ狭い等間隔で、末端の柱にかかる荷重を軽減し安定感が得られる。回廊を廻らす場合にも見られる。
- 三、中大等間隔。中央のみ柱間を大きく取り他は等間隔で、中央の広いのは内部正面に神像、聖像、仏像を安置する台座に対向し、像の運搬や礼拝に便。中国建築では極端に大きく取る例が多い。
- 四、中大等間隔小間。これは等間隔であるが、中央を大きく両端の小さいもの
- 五、等間隔両通減。中央部は等間隔であるが、左右を通減したものの。
- 六、通減。中央から左右に順次通減したもの。

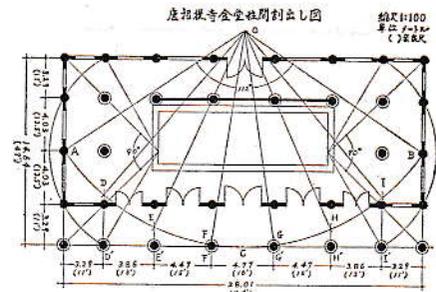
唐招提寺金堂は七七〇年代の創建で、今日まで焼失せず保存されている。貴重な通減柱間の遺構である。

ギリシヤ建築の内、オクタスタイルの建物を創建年代順に上げると、アテネ・アクロポリス・パルテノンは紀元前四四七—四三二年の創建で等間隔両端小間、セリナス・G・テンプルは創建時期不詳だが等間隔両端小間、サルデイス・アルテミス・テンプルは紀元前三三四—三〇〇年の創建で通減。これは唐招提寺と同じ。アテネ・オリンピウムは創建が紀元前一七四—一三二二年で等間隔である。

次に、中国建築にギリシヤ神殿と奈良時代の金堂との中間的実例を求めると、儒教建築、道教建築および仏教建築の中に見出すことができる。それらは木造建築で創建は紀元前五—四世紀と極めて古いのであるが、殆ど十五—十八世紀に再興されたものである。柱間の種類別に列挙すると、奉天省瀋陽皇寺正殿は等間隔両端小間、次に浙江省太白山天竜寺法堂は中大等間隔、山東省顔子廟復聖殿・同省泰岳廟峻極殿は中大等間隔両端小間、次に曲阜文廟大成殿・湖南省沅陵文廟大成殿・山東省孟子廟聖殿・北京雍和宮方仏閣・北京東黃寺大殿はいずれも通減である。

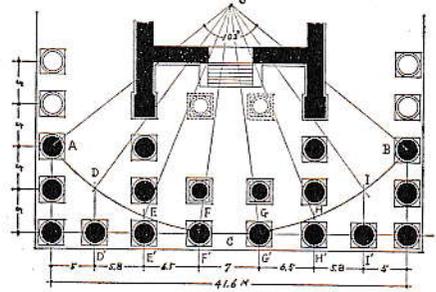
前列柱の柱間に六種類あることは前述の通りであるが、通減の場合、適宜に寸法を縮めたのではなく、構成美を表わすために規則正しい方法で採られたのではないかと思われる。そこで通減の柱間を扇形の円弧から割り出したものと推察して、解法を見出すことを試みた。唐招提寺金堂については図に示すように、前列線の中心C、側面の中心A、Bを通る円弧を描き、それによって出来る扇形A O Bを柱間数と同じく七等分する。円弧上の等分点から前列線に垂線





サルデイスのアルテミス寺院柱間割出し図

縮尺 1:200
単位 メートル



を下して交点を求めれば、それが
 削減の柱の位置で実測図と合致す
 る。

普遍妥当性を証するために、文
 化東漸の源流を遡って、ギリシャ
 および中国の建物についても適用
 され得るか解明しなければならな
 い。サルデイス・アルテミス・テ
 ンプルについては、前列線の中間
 と、側柱二本目の三点を基点とし
 て唐招提寺の場合と同じ手法で柱
 の位置を求めると、実測図の柱の
 位置と合致する。また、中国の曲
 阜文廟大成殿・雍和宮万仏閣・沅
 陵文廟大成殿については、上記の
 図法とやや異なるが、中央の二本
 の側面の二点を基点として同様の
 円弧法を図解することができる。
 唐招提寺金堂の吹放し前列柱の

柱間は奈良尺で中央が一六尺、次
 が一五尺、その次が一三尺、兩端
 が一尺と削減している。これは
 一尺、二尺と適宜に寸法を詰めて
 作り出したとは、とうてい考えら
 れない。社寺建築では支割法と称
 して、垂木間と柱間には倍数的関
 係があるとされている。その関
 係は首肯できるが、柱の大体の位
 置をどうして割り出したのだろう
 か、何か根拠が秘められているよ
 うに思われる。そこで円弧図法を
 用いて見たのであるが、きれいに
 合致することを確かめ得たのであ
 る。しかもギリシャでは通減柱間
 のサルデイス・アルテミス・テン
 プルにおいて、中国建築の通減柱
 間について同じ図法で解決するこ
 とができた。おそらく実際には、

円弧図法で柱の大凡の位置を定め
 細部の寸法は垂木の間隔に合わせ
 る支割法によって、柱の芯を出し
 たのではないかと推定される。
 円弧図法の外に通減柱間の割り
 出し方があるかも知れないが、円

弧図法が最も合理的であるように
 思う。この秘密を知っているの
 は、盲目の鑑真和尚と禪師に中国
 から随伴して来て、建立当時存命
 であったはずの弟子の胡國の人如
 宝のみであろう。

『旧師群像とヒーロー』

セツカチ先生

芹澤 正 憲 (43回)

次に、先生の担当されたチャー
 ジ科目が驚嘆に値するほど多岐に
 涉ったその周辺に解析のメスを入
 れてみよう。先生は担当の間口が
 甚だ広く、カリキュラムの視点
 のみに立てば、エンサイクロペデ
 イストはだしの万能教師ぶりを発
 揮されたもので、このケースでも
 恐らく校史のレコードホルダーと
 なるものであろう。

の極とも云うべき漢文まで、数々
 のカリキュラムの枝から枝へと
 ウグイスのように優雅に飛び交っ
 ておられたわけである。

府より夫々の該当科目について、
 尋常中学教諭としての教授能力を
 必要にすかつかつ充分具備するもの
 と認定されたわけである。換言す
 れば、その旨の文部省の大裁判入
 りのお墨付きであるわけで、学歴
 を鼻にかける若輩キャリア組の繁
 文縷礼の卒業証書に半歩たりとも
 譲るものではない。その上、自分
 には、積年の経験を蒸溜したカン
 の集積とも云うべきケース・スタ
 デイト、純粋に培養され発酵され
 たダイヤログというかけ換えの
 ない切り札を肌身につけている、
 と胸中にうつつ積するノンキャリア
 のハンディキャップを吹き飛ばす
 かのようになり、おちよほ口を失らせ
 ながら、咄々とまくし立てる先生
 でもあった。

即ち明治二十二年の科目リスト
 に依れば、先生の担当は歴史、地
 理、音楽の三科目となっており、
 明治二十八年には、さらに国語、
 漢文、書道が加わっているから、
 この合計だけでも既に六科目とい
 う振幅の広さとふところ深さであ
 る。それらの陽の極の音楽から陰

先生は日頃自分は尋常師範出と
 いう貧弱な学歴しかもたなかった
 が、この浅学非才の身では、いか
 に経馬に鞭打っても、せいぜい尋
 常小学訓導で姥捨山入りとなるの
 がオチである。これでは生涯ウダ
 ツが上らないと思い、一念発起し
 て文検(中学教員資格検定試験)
 の難関に挑戦して、歴史を足がか
 りとして書道、国語と六科目の多
 岐に涉り逐次各個撃破の上、どう
 やら陣笠教師の画く一応の夢の攻
 略に成功したものである。然る上
 は、これら夫々の免許状は文教の

この視野に立てば、げに先生は
 八面六臂の天賦の能力の上に、彫
 心練骨の血みどろの努力を重ねら
 れて、六種目の多岐に涉りよくぞ
 文検の難関を突破されたもので、
 この足跡のみでも奇蹟的な威業と
 して絶賛に値するものである。
 元来、黎明期教育の発足の時点
 では、なんでもOKという小間も
 のや式のようにや先生システムは
 寺小屋教育終焉と共に一応なし崩
 しとなって、新制度の尋常中学校
 では専科教師による精鋭能率主義

が採られていたのであった。しかし、発足以来、パーキンソンの法則の示唆するように『仕事の量に關係なく役人の数はひたすら増大する』との論理が罷り通り、教師定数は逐年ウナギ上りに上昇の一途を辿るのに反し、それに見合う財政面は意の如くならず、さなきだに基盤の弱かった明治政府はホトホト悲鳴をあげて、急速行政改革による定数削減に踏み切らなければならなくなった。なにやら行革旋風の吹き荒れている当今の世相を偲ばせるものがあるではないか。そうしたご時世では、先生のように、例えキャリア教師でなくとも、教科目担当の可能な小間ものや先生は、一騎当千とは参らずとも、専科教師の二人分ぐらいの担当は可能であろうし、したがって回転率はよく小廻りもきいて、カリキュラムのやりくりの面ではまことに重宝な先生としてもてはやされたのではなからうか。

現今のようにメカトロニクスを駆使しての相乗効果を狙うオートメシテムの下では、かつての日のもてはやされたよろづや教師によるマンツーマン式シテムは全く廃されて、専修教師による精鋭能率主義が採られており、それが、いまやケージの中で卵を製産する

養鶏工場のように、無精卵のまま生みばなされてベルトコンベヤーに乗せられて一丁あがり、お次々とマスプロダクトされているのが赤裸々の現状である。

よるずや教師、かく申せば、誰しも縁日の今川焼のようにひとつ並べて底の浅いお茶濁し先生を賑に浮べ勝ちであろう。しかし先生は、叩き上げの検定教師であればこそ人一倍己れの未熟さを知りその未熟さが聖なる職を汚さんことをおそれるの余り、至らざるを努力で補わんと、ひたすら身を削りながら使命感に燃えぬいていたのであった。かてて加えてノンキャリアのコンプレックスもあり、キャリア教師に後ろ指を指されたくないという陣笠教師の片意地から担当科目の予習研鑽は文字通り切磋琢磨を極め、歯を食いしばりながらの検討重ねは深更に及ぶのが常であった。しかし、いかに身を癒したとて、血の通う生身の凡夫の分際のこと、全能の千手観音や万能の神に比較されては甚だ迷惑であろう。況んや学歴浅く安月給の先生に、六科目というカリキュラムの盛沢山の重荷を背負わせてよたよた歩かせながら、なほかつパーフェクトを要求するのがどうだい無理難題というものではなからうか。

なほ先生の本命の書道では、その雄渾暢達な筆さざびは定評があり、市中の関係者の床の間を格調高く飾っているのにはしばしば遭遇したものである。殷鑑遠からずで先生の好んで書かれた『夢さ故に人はときどき陶酔を酌む』というメルヘン的な散文は、心の漂泊と感傷の高鳴りに堪えかねて、時には酒境に逃避するというロマンチックな面と、ニヒリスティックな反面を共棲させた哀歓交々の人生を綴めたものでもあろうか。またその持論の運筆論は奥底深く、端倪すべからざるものがあつた。即ち墨痕淋漓と書きなぐった一本の線にすぎない(一)の字の中にも、筆者の練成の度合いはもろろん、風格や人間性までがにじみ出てくるもので、したがって、書道の把握ぶり如何が即座に判定できる。書道家が、単純な字画のものほど執念のオニとなつて燃える所以である、というユニークな論旨は、いまだに耳にこびりついている。

なほかつ、なんともお気の毒なことに、飛び切りお人好しの先生は、お金にもならないのに学校の免状や賞状書きをも盛沢山に押しつけられて、それでも愚痴一つこぼさず、学期末など、寒々とした事務室の裸か電球の暗い光源の下で、オツムを残月幽光という具合に反射させて、冷めた素ウドンを吸りながら残業にいそしんでおられる聖なる姿を、われらは一切ならず網膜に焼きつけている。これらは一面では、先生の方能ぶりを示すもので、同時に反面ではピンボケ作業でも、是非共とおがみ倒されたり、また空景氣を付けてワッシュヨイワッシュヨイ唯し立てられると、すぐさまおだてのオミコンに乗ってうつらうつらと夢心地という、底抜けのお人好しぶりを示唆するものであろう。

このように、繚乱と咲き乱れるジャンボ、スーパー並のレパートリーは、静中教師としては空前絶後の輝かしいモニュメントであり、不滅のタイトルとなるものもある。このように数々のタイトルに輝く先生であったが、そのメモランダムを繕くなら、三等助教諭としてスタートされた当初の月俸は、大枚金拾円であった。活字の誤植ではないかと、いかに目を皿にして給与リストを右顧左弁しても、先生はいつもドン尻にどっかりと胡座をかかれはなしである。然る上は、この月俸金拾円也は静中教師群像中の最低給与のピンボケレコードとなるものであろう。明治二十八年のリストに依れば五割増しの金十五円也と大巾アップされているが、これとても同僚の小川先生の月俸八十五円也に比べれば、正にお月さんとスッポンほどの隔差である。さればとて先生がピンボケ俸給に不貞腐れてサポタージェを起していた訳ではないらしい。

当時のカリキュラムを繰れば先生は週二十三時間に対して小川教諭は二十一時間と歴然と明記されており、先生は同僚を上廻る精勤ぶりが記録されているからである。同じ職場の同じ教師で、勤続年数もほぼ同じでありながら、なんでこうも格差があるのか。正に人権蹂躪的な差別待遇ではないかと今日の日教組さんを煩わすまでもなく、誰しもが訝るより抗議のノロシをあげたくなるところであろう。しかし、それにはそれなりの理由があつた。当時の文教の府の人事評価の平衡感覚を支える指導路線のもたらしたジレンマであったわけである。

明治政府の広く知識を世界に求めという五ヶ条のご誓文奉戴の精神に則り、なにごとく西洋へと草木もなびく時代であった。なべて

の教育の範を泰西に取入れて外来文化のコピーに熱中する余り、お備い外人教師がお膳立した最高学府を象牙の塔化して、帝国大学と華麗に命名の上、権威の官学のトップに据えたものであった。したがって、外人教師のお膳立した帝大出の英才は、自動的に人事評価のピラミッドの頂点にランクされたわけである。

当時の外人教師達の見識は頗る高く、日本人をば無智で怠惰な劣等民族視していたのであった。當時書き残された『神はわれわれを北欧のような寒冷でやせた土地に置いて、この怠けもの(註、日本人のこと)を恩恵深い豊饒な土地に置くとは、なんたる不公平であろう』との文献がこの間の経緯を雄弁に証左するものであろう。

アングルを変えて、文教当局に釈明を求めたとしても、文検上りの助教諭にすぎないヒラ教師と英才の登竜門をくぐった小川理学士では、同じ教師でも、身上的にテューチンと釣り鐘ほどの隔差がある。従って俸給の点でも六分の一ぐらいであったとしても、寶石のキャリアとただの石ころにすぎないノンキャリアでは当り前すぎる開きで一向に驚くには当らない。よく給与法規を研究した上でモノ

を申しなさいと、ドジョウヒゲの官員さんから親方日の丸的なお叱りを蒙ったことでもあろう。なんとノンキャリア教師は路上に捨てられた粗大ゴミ扱いであるが、何分泰西教育の精華が繚乱と咲き乱れるバタ臭い花園では、一旦制度化された組織はあくまで神聖視されて動かす余地はなく、例え独学よく教科目の文検の難関をパスしたとは云え寺小屋先生から叩き上げでは、ロマンに充ちた俸給と目をむくような待遇は及ばぬコイの滝上りであったに違いない。それに反して、大学令に明記されているほど学の蘊奥をきわめずとも、『学士さまなら嫁やるか』の巷間の消息が物語るように、繁文縷礼的な卒業証書にも云わせたキャリア教師は、またの名をワタリ鳥

先生と呼ばれてセツカチ先生のようにならぬ、一年経つか経たずに他に転任して行き、しかも渡り歩く度毎に俸給も雪ダルマ式に膨れ上ったものであった。のみならず三十才になるやならずの若さで校長人事のローテーションに組み込まれて、鼻下に美髯を蓄わえて、颯爽と他県の校長に栄転して行ったものである。中には生徒の排斥運動がこじれて転出を余儀なくさ

れたが俸給もついでにアップという、とんだ餓別のプラスアルファがついて欣喜雀躍して、いそいそと赴任して行った焼け太り校長先生も誕生したりした。

当時の教育界も、先生の置かれたこのような不均衡是正を頂門の一針として追放に立ち上るべきであったろうが、何分明治という欽定憲法下の錦の御旗の下では、教組の結成などはおろか、抗議のノロシさえ百姓一揆と同じく峻しいご法度、もし禁を犯せば、たちどころに文官文限令による懲戒免官という大ダンピラが待っていたわけである。泣く子と地頭にはの壁えどほり、泣き寝入りするより方法がなかったのであろう。

もつとも、一金拾円也の給与にしても、現代の貨幣価値に換算すれば明治二十年当時はカケンバ一杯五厘の時代であるから、そこでの十円也は、カケンバ二千杯に相当、現今の一杯二〇〇円に換算すれば、四〇万円の月給取りということとなり、さまでピンボケとは呼ばれなくなりそうである。あれこれ勘ぐれば、当時の中学教師はエリート中のエリート職業として社会的にも給与面でも破格の待遇を受けていた証左となるものであろう。いづれにしても、先生の給

と問題の周辺を追跡すれば、先生の数々のタイトルのうちに歴代教師群像中の最低俸給という輝かしー！否！！ピンボケレコードも否応なく加わるわけである。

この旨、泉下で囁かれて安倍川のせせらぎを枕唄と聞き乍ら安らかな眠りを貪りおられる先生も、今更シャバとのつき合いはご免だと渋りながらも『さうだ、イカレボンチだが、ちょっぴり取り得もあるセリザワに云われて見れば、この怨念だけはうさ晴らしてスッキリせにゃ』とばかり、近頃極楽浄土でも稀にきく、メガトン級のクシャミをドンと一発爆発させる

達を吃驚仰天させて、おーい原爆らしいぞ、いよいよおっぱじまっ たなあ、米ソのミサイル合戦が。核の空洞化どころか、いよいよ野放し時代到来だ。丁度頃合にシャバにおさらばしてよかったな、と極楽界隈はおろか、地獄三界三途の川から修羅の峠あたりまで、うるちよる喚き巡っていることでもあろうか！阿々。

次に先生が往時茫々時代、わが静中の音楽教育事始に際して栄光に輝く初代教師の大役を仰せつか

時代の音楽の啓蒙に挺身されたというユニークなメモランダムに挑戦してみよう。

われらの時代のさる年、折からの体育振興の潮流に乗って遽かにクローズアップされてきた校友会各部の対外試合に備えて応援団結成を要望する声が喧しくなってきた。学校側も響きに応ずるよう対応して、先発他校のカジの取り方を参酌して、羽撃き鋭く飛翔させようという画期的なプロジェクトが狙上りのせられた。

まず呷々の声を挙げるに当って焦眉の急は、目玉となる応援歌の作詞作曲であった。その応援歌詞は、その後われらがインターミッドを始め各種の対抗試合に駆り出される度毎に、時に首尾よく対戦校を制圧して歓喜のルツポに身を熔しながら、時には喰うか喰われ

るかかのシューゲームの末惜しくも敗れて万斛の涙を呑みながら戦歌のように斉唱した『春静陵の雄叫びや 岡辺万だの花ふるい』の青春のロマンに溢れる絶唱で、当時の在校生が作詩し教頭のアボン先生が添削の雅筆を加えたものであった。アボン先生は柔道三段の猛者でもあり、その魁偉なイメージに反して教師群像中でも抜群の詩藻豊かな先生で、その頃の皇太

子ご渡欧に際して全国から募られた奉札歌に、天晴れ一位入選の栄冠に輝いた。文字通り文武両道の達人であったわけである。在校生との名コンビで、かかる秀絶をえたのも静中応援団史に馥郁の華を添えるものとして特筆顕彰さるべきものであろう。

その応援歌の披露と演練をかねて、さる日校庭に集められた生徒一同の前に時代ものらしいオルガンが持ち出されたことがあった。長らく使われなかつたと見え、小さいさんが塵払いではたく度に舞い上るチリ埃りなどを、横目に睨みながら、さて一体誰れが弾くのだろう、本校には音楽の教師などおらんのに、と一同怪訝な面持ちをかくせなかつた。

すると、やおらん群れを押し分けて、例のトレードマークの海軍服スタイルの先生が、へのへのもへじの好々爺顔を綻ばせながら、チョンチョンキナキナのテンポでよろめき出て、オルガンを前にして、深々と腰かけられたではないか。さてさてまかり出でたるは、この辺りにウロチコロする妖怪変化のたぐいにて候！などのハッタリ口上は申さなかつたが、凝視める一同はヤブから棒に闖入してきた先生を、場違いどころに迷い

込んできた風来大ぐらに見立てたのか、ヤレヤレこまつたセッカチさんだなあ、抹香くさいセッカチさんじゃよう、木魚かチンボンジャラジャラぐらいならいざ知らず、相手が西洋のメカニズムの固りのようなオルガンでは、どだい手に負えんずらやあ、とケンもホロロの評定であった。針の穴に象をくぐらす芸当はどだい無理、とテンから決めてかかる生徒一同を尻目に、先生はその時少しも騒がず、いとも場馴れた調子でオタマジャクシを横目で睨みながら、音程もリズムもたしかに、テンポもイントネーションも軽快に、メロディも時にエレガントに、時にシンメトリックに応援歌のオールチャプターをダイナミックに弾きこなされたではないか。次いで間髪を入れず起立して情感溢るる歌唱で歌詞をポルテージ高く歌いながら、私に続いて一句づつ春静陵の雄叫びや、ハイ！と板についた草草でリードされたではないか。淡いパスが曲想に合致したメリハリのある、美しい歌唱であった。挙句は変幻自在な手ぶり、幽雅なこなしでタクトまで振られる、というスーパーコンダクターぶり。

生徒一同は、突如眼前に展開された事の意外性にびっくり仰天した。そして次から次へと先生の手のうちから魔術師のように繰り出される音楽の三昧境に引取り込まれて、魅せられ、酔わされて挙句は果然として声も出なかつたのである。正にイタズラ小僧の豆鉄砲の閻撃を喰らって目ばかりパチクリさせているハトの狼狽ぶりを彷彿させるものでもあろうか。この醜体こそわれらの受けたダメージが、いかにショックキングであったかを証左して余りあるものと云えよう。それにしても知らぬがホトケとは云え、先生のそのようなハイレベルの音楽教養の片鱗すらもソユ知らなかつたわれらこそ、底抜けのイカレポンチとの汚名を甘受せねばならぬだろう。それともイカレポンチにつける間抜けグスリはない、とニベもなく突き飛ばされるだろうか。解説するなれば、先生は新生静中のスタートした黎明期に、すでに音楽科の文庫をパスして、静中唯一人の、草分け的な音楽教師として、そのパイオニア時代の啓蒙的役割を果しながら、天下晴れて教鞭をとられていた貴重な存在であったからである。

なほ先生はピアノにも堪能で、当時同好者のリサイタルでベートーベンの『エリーゼのために』などの名曲を演奏されて、楽聖の芸術の至境にとっぷりひたられていた由。そのようなハイレベルの教養を身につけられていることより推し量れば、オルガンによる応援歌の伴奏ぐらには兎戯に類する低次元の茶番劇といわねばならなかつたであろう。

先生が音楽教師として就任した当初は、音楽などという呼び名は正式な教科のセクションにはなく、専ら唱歌と軽く呼び習わされて、学問の分野には入れて貰えなかつたらしい。しかし、この草分的な音楽教師は、もの珍らしさも手伝って世の好奇の的となつたものであった。しかも、舶来の楽器オルガンなるものに合せて歌を教える先生を、またショーマンの資質とは凡そ縁遠い先生を、三味線片手に小唄・都々逸を流し歩く新内流しの並流と錯覚して、おえらい先生などはツユ思われず、せいぜい芸人か大鼓持ちぐらいの扱いしか受けなかつた、という。

元来封建日本には芸術家という概念は全くなく、楽器に合せて歌を唄うものはすべて芸人として軽く片付けられていたのである。先生はこれではならじと、機会ある毎に、オルガン・ピアノなどの西洋渡来の楽器を弾くものは、西洋ではアーチストと呼ばれて、社会のハイソサニティにランクされ、誇り高く生きていた。その西洋楽器をば大和魂で弾きこなすワシをドジョウスタイの安米節並に評価するとはいかに情けない、と和魂洋才のオニとなって啓蒙のご託宜をぶつたが、ノレンに腕推して『そんじゃハキ溜めに下りたツルずらやあ』ぐらいで、心中おたやかならず、腐り切つたものであるという。なにせ泰西音楽のABC時代のこと、いかに心の窓を開いたとて、遙かなり明治の音楽街道であつたわけである。

その頃の音楽は導入された泰西色一点張りのカリキニューラムで充たされ、あちらでポピュラーになつたソナタやフォークソングのオリジナルなコピーが多く、当時一世を風靡した文部省唱歌の殖生の宿や浜辺のうた、ゴーンアザデーなどは、何れもこのカテゴリーに属するもので、いまだに明治人の琴線をナイーブに揺さぶる歌曲でもあつたわけである。歌は世に於てあちら生れの歌がもてはやされたのも、そのロマン充ちた歌詞やらペーソスある旋律が日本人の心をしかと捉えて離さなかつたものであろう。また愛唱されたテネシー州歌は失恋のワルツであり、

オクラホマ州歌はミュージカルのオクラホマの主題歌、ケンタッキー州歌は民謡のわがなつかしきケンタッキーホームである、という具合に、お堅い管の州歌すらかくの如しとすれば、他のレパトリの硬軟自在のほどは推して知るべしであらう。

なほ、黎明期の音楽行政を手塩にかけて伊沢修治は英知ある官僚で、新日本音楽をば導入された泰西のコビイ一辺倒のスタイルのままに置くのに飽き足らず、伝統の邦楽の長所をも取入れて、和洋をブレンドした特異なオリジナリティを創造せんと腐心して取組んだのも進取的な一つの見識であった。しかし、この試みは、価値体系の全く異なる土壌に育かれたフアクトリーのブレンドで、恰も比重の違う水と油の混合のごとく、それぞれのエレメントは層を作つて分離して頑として融合せず、そのプロジェクトは逞しい野望にかかわらず、不毛のうちに断念せざるを得なかつたのである。

なに分、邦楽の代表楽器の三味線一つを取上げてみても、長唄、清元、浄瑠璃と伴奏のレパトリイ毎に、細棹、中棹、太棹と異なってくる。これを洋楽器の音階に合わせて見れば、バイオリン、チェ

ロ、コントラバスとなる、という具合で、いよいよ複雑怪奇ぶりを隠見さすばかりで、所詮、双方が待ってましたとばかりに安易に結合するほど単純なものではなく、先覚の憂慮したように試行錯誤の反覆を繰返したにすぎなかつたのである。

ここで晩近、国歌としての是非について論議の喧しい「君が代」を取り上げてみるなら、君が代は周知のように、古今集の読み人知らずの古歌を原歌として雅楽寮の林広守が雅楽調に作曲、更にドイツよりのお備い楽師のエッケルがマーチ風に編曲したものである。そもそも、雅楽なるもの古事来歴は、泰西からシルクロードを経て中国に、更に蓬萊の島のが国にもたらされた史実が物語るように、純粹なオリジナリティでないとなれば、作曲、編曲共に泰西色が濃厚であるのは免れず、正に東西をブレンドして創られた和洋折衷の典型的なサンプルであろう。いまやその歌詞の統治者讚美的な性格を巡り、平和憲法下の国歌としての適否についてカンカンガクガクの論争が遽かに抬頭しはじめている。しかし、何れの国の国歌を採り上げて見ても、例えば、英国の「ゴッド、セーブ、ザ・キング」と

同じく統治者礼讃的なアドバンシング・マーチであるか、またはフランスのように前統治者を倒して勝利を収めた革命を礼讃するというカテゴリーに入るの専ら創られた時点での国情によるものである。明治維新というコップの中のアラシを得て成立した日本の国歌が、あの時点であのようなスタイルを採つたのも必然の成行であろう。しかし元首が象徴と変つた新時代に入つてその是非論が抬頭するの、これまた必然の成行と云わねばなるまい。よろしく論議をつくして煮えつまつた時点で議會

制民主主義の多数決のルールにしたがって、大筋の決着をつけて、更に国民投票という手續に訴えて国民の最大公約数的なコンセンサスを得べきであらう。

いづれにしても、その黎明期の祝祭日には、その君が代が先生のオルガンでの厳しゅうな伴奏の下に、われらの先輩達が交々の感慨にひたりながら斉唱したことは間違いない現実であらう。

とまれ、伊沢式の和洋折衷案は画餅に帰したとは云え、旧幕臣の流れをくむ先生は、その試みに随喜の涙を流したのであらうことは想像に難くない。なにせ、明治維新の際、瓦解した旧幕体制をそのま

ま丸がかえに抱き込んだ静岡藩の精神風土には、いたるところに薩長の藩閥政府への反骨の血脈が色濃く滲みでいたからである。

なほ先生の就任後いくばくもなくして世は日清か日露の軍国時代に突入して、音楽などは婦女子の女々しい玩弄物、戈とる男の兒の身につける業に否らず、との世の風潮よりして、中学の正科目よりカットされて、あえなく土壇場入りとなり、永遠のエビローグを迎えたわけである。しかし、その斜陽化後の残務処理までを背負い込まれた経緯よりすれば、先生は一面では静中の音楽教師としては草分け的な存在であり、しかもそのエビローグを飾つた最後の音楽教師であり、かつまた、世の音楽教師としては破天荒の「和魂洋才」という世にも珍奇な神話の持ち主であつたわけで、共に煌くピラミッドの頂点に立つ栄光を永遠に担うものであらう。

（完）

叙 勲

- 叙勲お祝い申し上げます。
- 43回 三宅静雄前東京大学教授 勲二等瑞宝章
- 44回 野間省一講談社名誉会長 勲一等瑞宝章

総合広告代理店

株式会社 ア ド プ ロ

代表取締役 朝比奈 正 三 (67回)

東京都千代田区内神田 3-4-5 岡崎ビル 3階

TEL 03-254-2171 (代表)

内科・外科・整形外科・皮膚科・放射線科
人間ドック

熱 函 病 院

院 長 小 坂 博 (67回)

住 所 熱海市春日町12-2

TEL 0557-83-3131

こえ

28 原崎 癸作
 関東支部に関しては種々格別な御配慮を頂き感謝に堪えません。

私も年令も多くなり、同窓の友も少なく、殊に関東には殆んど数えるほどしかありません状態ですから、名簿から私の名前を削除して頂きとう座御います。従って諸書類も今後お送り願わなくても結構で御座ります。永い間ありがとうございました。

41 篠原 正
 去る十二月五日、急性心不全のため急逝いたしました。

生前、とくに青春時代母校に御世話様になりました事を故人に代りまして厚く御礼申し上げ、この上とも母校の発展を御祈り申し上げます。故正 妻孝子

42 松永 孝
 同窓生諸君の御活躍を希っています。

今年は暖い冬で大助かりでしたが、今や足腰が弱くなって困ります。

42 牧野 力
 前略 同窓会のごで色々ご苦労様です。御礼申し上げます。
 五十七年度会費未納の請求が来

ましたが、小生は払い込み控を持ってます。(五七・五・一五消印)従って、五十八年度会費として納めます。帳簿を訂正しておいて下さい。

43 倉沢 栄吉
 まだ現役で、老肉に鞭打っています。十一月に久しぶりに静岡に行き、様子の変わりぶりにびっくり。43回のどなたにも連絡せず、パレタからおこられるぞと思いつつ夜帰京。

44 外川 誠
 卒業してから五十有余年二百人近く居た友も七十名近くへったと、横須賀で医院を開業して居る同期の中村満夫君(旧姓石井)が教えて呉れた。彼は、お前が最後の一人になると私に云うが、私は心優しく最も近くに任んで居る医者の方に最後の一人になって欲しいと思つて居る。

45 蝦原 一郎
 同窓会の運営・事務ご苦労様です。

足痛で歩行困難なため会合に出席できず残念に思います。年を取ると色々故障が起つてきます。今後ともよろしくお願い致します。

会費送金遅くなり申し訳ありませんでした。

46 阿部 俊一
 家庭の事情で欠席が続いていて申訳ありません。

初期の幹事土方多美彦君が去る一月十九日亡くなりました。御知らせまで。

46 長浜 謙二
 今年は古稀を迎えます。遙かなる、今迄の年月に起つた事どもを想うとき、誠に感無量です。

少年の日々は今は楽しき思い出で、学校の庭から見た刻々に変る富嶽の姿を思い出します。

47 吉見 四郎
 去る六月末で会社も退き、週休七日制の身分となりました。何とか元気でやっています。

51 山本 俊朗
 お蔭様で何とか元気に勤務して居ります。

51 楳田 長
 関東支部の御発展をお祈り致します。

53 野崎 昌輔
 幹事さん毎席御苦労様です。会の隆昌を祈ります。

54 黒岩 勇三
 会報毎号懐しく拝見させて頂いています。五四期の一人として、とくに鹿原梯次君にはお世話になっています。

54年度、熱海で飯を尽して以来小生の出不精からご無礼しており。尚、13号の安東君、その他の諸兄の近況、懐しく拝読いたしました。

54 八木銈次郎
 昨年第二の定年を過ぎて、今は下請会社からNEC日本電気のしごとを請負っています。

したがってあと二、三年でチョンになると思います。みなさんと共にきびしい世の中を生きてのびたいと思います。

請負先 NEC ショールーム(千代田区内幸町日比谷シティ内)

55 吉田 盛昭
 出張が多く、八十三才の母が清水に居りますので妻もほとんど清水に居りますので遅くなり申訳ありません。

55 相馬 英夫
 昭和五十七年度年会費をお送致します。小生昨五十六年十一月俸年後一年嘱託で勤めた後、仲間組東京支店を退社致しました。職業欄を御修正下さい。目下心筋梗塞を再発しない様静養につとめています。

55 伊藤 令一
 昨年の甲子園の野球は相手が悪く残念でしたね!

56 中村 治郎
 平素御無沙汰致しておりますが会の運営その他いろいろ御苦労様です。来年もよろしくお願い申し上げます。

57 鳥居 義彦
 お蔭様で、元気に過しております。

57 田中 勇
 昨年は随筆集「釣り場にて」の出版に際し、いろいろとお世話になりました。とくに同期生の皆さんのご厚情、ありがとうございます。

58 岩本 忠吉
 静岡の後輩と知つて、村松友規の小説を時々購読しています。「時代屋の女房」も良かったが「三五郎ララバイ」の駿河弁の溢れる諸場景は、上質の小説らしい小説を読む愉しさを思い出させてくれました。

58 小山 昂之
 納入が遅くなりましたして申訳ございません。至極元気で勤務しております。次男も四月より社会人になります。親として肩の荷が半分おりました感じでございます。皆様によりろしく。

58 鈴木 勝義
 総会にも欠席がちで失礼してい

ます。今年は家康ブームとか、私の先祖も旗本、以前からルーツ調べをしています。静岡へもよく調べに行きますが、寛政年代から幕末までの旗本鈴木家の資料お持ちの方がありませんら、ご教授願えればと存じます。よろしく。

58 猪瀬 忠賀
現在病氣療養中で会のお役に立てず申し訳なく思っております。皆々様のご健勝をお祈りしております。

59 近藤 陽三
(社)日本ホッケー協会強化委員長である私は、第九回アジア大会に日本男女ホッケーチームの総監督としてインドニューデリーに行つて来ました。(57年11・19・12・5)

ホッケーが岡技であるインドは日本では考えられない熱狂的数万人の観衆の中で岳南健児の意気を示して来ました。

59 加納 久夫
元気でおります。

去る12月21日、日本テレビズームイン朝のウィッキーさんのワンプoint英会話にかかり、つたない英会話を披露しました。どなたかごらんになりましたか? 目下新銀行券の製造に取組み、頑張っております。

60 満岡 猛
前回同窓会には都合できまじましたが、次回は是非出席させていただきます。と思っております。

63 白鳥 芳夫
昨年八月一日より会計事務所と独立分離し、池袋の西武スポーツ館隣りに不動産鑑定事務所を開設しました。事務所が二ヶ所になり多忙な毎日を送つて居ります。

66 安池 智策
66期の皆様お元気ですか。23年3月旧中四修ですが66期に加えていただき、通知をいただいております。勤務先は東京都庁です。直通電話は(212)四〇四九です。ご連絡をお願いします。同期生戸塚純一氏も都庁に在職していることが最近判明しました。(横浜市港北区富士塚1の13の19)

66 安田 正弥
伊豆大仁CCCへ出向して七年目。週末が忙がしい職業ですので欠席が多く申し訳ありません。

67 山形 誠
名簿補遺訂正表56・9-57・5(変更事項)いただきましたが、勤務先は(財)日本冷凍食品検査協(研究部長・技術士)ですのでよろしく願います。

70 水野 博司
なかなか会合に出席できず残念ですが、幹事には感謝してまします。現在、シブチヨシ(波川)を楽しんでいます。

70 宮代 省一
また会う日までお元気で。昭和五十八年、年会費をお送りします。

68 伊東 良平
いつも催促された上で会費だけを納めるだけの役立たずの会員で心苦しく思っておりますが、会報は有難く拝見いたしております。57年11月12日発行の第14号では、村井東助氏の「堀君の思い出」に感銘を受けました。いつか私も友人についてこんな文章が書けたらと思えました。

68 雨宮 明生
青森県で石油備蓄基地建設に従事しています。単身赴任。故郷と違い寒さきびしい所です。

68 伊月 喬
会報にて堀副会長の計報を知りご活躍された副会長のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

68 杉山 和子
お世話役の方々いつも御苦労さまです。会費がおくれ申しわけなく存じます。関東同窓会の御発展をお祈り申し上げます。

70 原田 行造
新たに仲間入りさせていただき、同窓の方の消息がわかりたいへん嬉しく思っています。いろいろお世話になることと思いますが、よろしく願います。

71 奥村鋭一郎
現在香港に居ます。

70 原田 行造
新たに仲間入りさせていただき、同窓の方の消息がわかりたいへん嬉しく思っています。いろいろお世話になることと思いますが、よろしく願います。

五七年度会費拠出者

- | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------|------------------|-----------------------------|-----------------------------|-------------|----------------------------|-------------|---------------|----------|-----------------|----------------------------|-----------------------------|---------------|-----------------------------|--------------|-------------------------------|
| 44 長野寿一郎 | 45 榎原一郎、黒田明彦、桜井誠 | 46 大藤道直、田中修三、磯塚倫三、青木清明、阿部俊一 | 47 野口真、佐津川太郎、野崎衛治、嶋谷亮一、吉見四郎 | 48 飯田辰司、影山浩 | 49 陰山修次、石割敏夫、山村忠平、嶋三四郎、安本久 | 50 篠原泰、浦野庸二 | 51 仁科義郎、大庭富士夫 | 52 市川雄八郎 | 53 谷静夫、森下洋、手島正一 | 54 島田良彦、片桐鎮夫、野崎昌輔、稲畑勝、木宮高彦 | 55 山田幸作、柴崎芳三、佐野資郎、大畑忠夫、黒岩勇三 | 56 八木銚次郎、平林一郎 | 57 吉野悟郎、堀江重遠、杉原俊一、小沢忠樹、伊藤令一 | 58 吉田盛昭、相馬英夫 | 59 石塚由雄、山崎勝吾、原敏彦、北村甫、山田隆、中村治郎 |
|----------|------------------|-----------------------------|-----------------------------|-------------|----------------------------|-------------|---------------|----------|-----------------|----------------------------|-----------------------------|---------------|-----------------------------|--------------|-------------------------------|

五七 米沢正次、森下恒彦、小花正昭、福住俊郎、望月修、鳥居義彦、田中祐三(勇)

六四 酒井三到男、豊納健蔵、阿部修治、神谷武男、永田進一

君島武男、奥村至朗、飯塚迪子、林さち子、石割浩司

五八 安井幸一、熊倉均、望月恵一、島村悟、田熊博邦、須山静夫、伏見祐一、佐野正夫、岩本忠吉、小山昂之、鈴木勝義、猿瀬忠賀、萩原義臣

六六 中野省吾、杉本幸貞、小嶋清司、加藤昭、江塚弘、大村敏夫、村松武司、大坪信之、安池智策、安田正弥、原常勝、湯浅謙、山梨裕司、大森恵吉、稲川雅久、渡辺真任、山岡進、滝川博、角田栄一、小杉弘、湯本恭三

八七 家徳洋一

九七 岩崎保浩、新庄尚亮、小沢靖弘、渡沢富美子、松本滋

佐塚一寿、前原誠

五九 長谷川邦三、鈴木義男、菅原操、安東平一郎、青木豊

六八 松村献一、藤波真五、杉山忠男、白鳥健次、佐藤忠行

第十一回ゴルフ大会

日時 五十六年十二月九日

場 所 伊豆大仁CC

優 勝 荒谷じつ子(68期)

準優勝 石山 宏(70期)

第三位 岩崎 堅司(70期)

参加総数 二十一名

第十二回ゴルフ大会

日時 五十七年七月七日

場 所 東名CC

優 勝 渡辺 安一(6465期)

準優勝 平岩 正史(87期)

第三位 岩崎 為明(67期)

参加総数 二十四名

第十三回ゴルフ大会

日時 五十七年十二月八日

場 所 伊豆大仁CC

優 勝 増田 安国(67期)

準優勝 岩崎 為明(67期)

第三位 西畑 隆志(67期)

参加総数 十六名

第十四回ゴルフ大会

日時 昭和五八年五月一日

場 所 東名CC

優 勝 海野 定也(67期)

準優勝 浅井 幹夫(64期)

第三位 実石 欣哉(71期)

参加総数 二十二名

常連の38回石割氏、42回岩崎・官沢・村松の諸先輩や、久しぶり参加の47回星野、53回奥野両氏をはじめ、静岡からの参加も加え二十三名が麗峰富士のもとプレーを楽しんだ。

計 報

謹しんでご冥福をお祈り致します。

- 丸山毅夫(27) 河島 光(36)
- 藤原 正(41) 青木 栄(45)
- 桜井 誠(45) 土方多美彦(46)
- 村松 喬(50)

編集後記

今号は「各期の便り」「読物」が沢山集り、編集部一同感謝しております。

桜井誠氏は四五回幹事としてご尽力下さいましたが、五月十二日死去され、五月十三日の告別式には同期の鈴木亦門、田代正、田附敏三等の諸氏及び上杉副会長が参列しました。

村松喬氏は当会設立時から顧問

として会の運営に御尽力頂きましたが、昨年11月15日死去されました。謹しんで御冥福を祈ります。

六〇 渡辺博、堤崇、小林金次、服部昌夫、満岡猛、原善三郎

六九 福山秀雄、山本竜男

七〇 若林久二、森野寿美子、鈴木明次、白石通子、中馬敏雄、山田隆嗣、田中元、水野博司、宮代省一、原田行造

七一 関本光宏、小関修身、相川東一、科田和男、大石勲、奥村鋭一郎、渡辺雅俊、児玉文男、遠藤吉隆

七二 大塩幸男、大石一輔、荒浪直彦、吉川隆士、中野喜久男、白鳥芳夫、塩沢敬、伊東守、蛭川博之

七三 吉井銀郎、間淵啓子、大長義信、鈴木千秋、塩坂雅司

鈴 与 株 式 会 社

取締役会長 鈴 木 与 平 (44回)

清 水 市 入 船 町 11 - 1
TEL (0543) 53-3111 (大代表)

トッパン・ムーア株式会社

取締役社長 宮 澤 次 郎 (42回)

東京都千代田区神田駿河台1-6
TEL (295) 2411 (大代表)

凸版印刷株式会社

東京都台東区台東1-5-1
TEL (833) 2111 (大代表)

株式会社 講 談 社

取締役名誉会長 野 間 省 一 (44回)

東京都文京区音羽2-12-21
TEL (945) 1111 (大代表)

株式会社 東 電 社

取締役社長 岩 波 信 平 (42回)

東京都中央区日本橋2-1-21
TEL (271) 2701 (大代表)

セリ企業グループ

代表者 芹 澤 正 憲 (43回)

佛銀座瀬里(573)4031~3
佛セリ.エンタープライズ(574)7295~6
佛タカ.セリ(572)6881~2
佛ニュー.セリ(571)4588・6255
佛セリ.プレイング.マン(462)38-0571(代)

川 根 銘 茶

三保乃園 山 菅 茶 店

山 菅 章 雄 (53回)
(村 松 正 七)

東京都港区南青山1-20-6
TEL 03-403-5760

本田技研工業株式会社

川 島 喜 八 郎 (52回)

東京都渋谷区神宮前6-27-8
TEL (499) 0111 (大代表)

日本レーベル印刷株式会社

代表取締役 岩 井 平 一 郎 (57回)

本 社 静 岡 市 国 吉 田 6 4 5
TEL 0542 (62) 1111 (代)
東 京 中 央 区 京 橋 1 - 2 越 前 屋 ビル
TEL 03 (272) 4651 (代)

建築コンサルタント・設計施行業務
建築に関する御相談は御気軽に……

株式会社 大 雄

取 締 役 社 長 奥 野 孝 (53回)
取 締 役 営 業 部 長 奥 野 広 (58回)

本 社 東 京 都 台 東 区 東 上 野 2 - 1 8 - 7 共 同 ビル 1 0 階
TEL 03-834-5331 (代表)